

たつの市

奥村廃寺跡

(一) 姫路新宮線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

たつの市

奥村廃寺跡

(一) 姫路新宮線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は兵庫県たつの市神岡町北横内に所在する、奥村廃寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は（一）姫路新宮線緊急地方道路整備事業に伴うもので、兵庫県西播磨県民局竜野土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成12年度に本発掘調査を実施した。
3. 出土品整理は兵庫県西播磨県民局長の依頼を受けて、兵庫県立考古博物館が平成21年度に実施した。
4. 本書に使用した方位は国土座標（第V系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。（日本測地系）
5. 出土品の分析は柱の樹種同定を株式会社古環境研究所に依頼した。
6. 地図は、図版1：国土地理院「姫路」1/200,000
図版3：国土地理院「龍野」1/25,000
図版4：龍野市「龍野市現況平面図15-1」1/2,000
を使用した。
7. 執筆は、第4章を株式会社古環境研究所が行った以外は篠宮　正が行った。
8. 編集は篠宮が行った。
9. 本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、旧龍野市教育委員会・たつの市教育委員会および、
今里幾次・岸本道昭・志水豊章・義則敏彦
の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

奥村廃寺跡

(一) 姫路新宮線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例言

目 次

第1章 遺跡をとりまく環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の契機と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査の経過	6
第3節 出土品整理の経過	7
第3章 発掘調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	9
第3節 遺物	11
第4章 自然科学的調査の成果	15
第1節 奥村廃寺出土柱の樹種	15
第5章 まとめ	17
第1節 要約	17
第2節 遺跡の範囲と時期	18
図版	1~16
写真図版	1~19
報告書抄録	

挿図目次

第1図 奥村廃寺の木材	16
第2図 奥村廃寺跡南東部の造構配置	17

表目次

第1表 奥村廃寺における樹種同定結果	16
第2表 奥村廃寺瓦類一覧	20
第3表 奥村廃寺土器類一覧	20
第4表 奥村廃寺木器類一覧	20

図版目次

- 図 版 1 遺跡 1 兵庫県の位置 2 たつの市の位置 3 奥村廃寺跡の位置 (1/200,000)
図 版 2 遺跡 奥村廃寺跡周辺の主要遺跡一覧
図 版 3 遺跡 奥村廃寺跡周辺的主要遺跡 (1/25,000)
図 版 4 遺跡 奥村廃寺跡の本発掘調査区と既往の調査区の位置 (1/2,000)
確認調査と本発掘調査位置 (1/1,200)
図 版 5 遺構 造構配置 (1/200)
図 版 6 遺構 東半遺構平面・断面 (1/100・1/40)
図 版 7 遺構 西半遺構平面・断面 (1/100・1/40)
図 版 8 遺構 挖立柱建物SB01 (1/50)
図 版 9 遺構 挖立柱建物SB03 (1/50) 柱穴P07・P05・P04平面・断面 (1/20)
図 版10 遺構 挖立柱建物SB02 (1/50) 清SD01・SD02断面 (1/10)
図 版11 遺物 確認調査区出土瓦 1 (1~4)
図 版12 遺物 確認調査区出土瓦 2 (5~8)
図 版13 遺物 確認調査区出土瓦 3 (9~10)
図 版14 遺物 本発掘調査区出土土器・瓦・柱 (11~15・W1・W2)
図 版15 遺物 本発掘調査区出土土器・瓦 (16~25)
図 版16 遺物 本発掘調査区出土瓦 (26~35)

写真図版目次

- 写真図版 1 遺跡 1 奥村廃寺跡 遠景 (東から)
2 奥村廃寺跡 遠景 (南から)
写真図版 2 遺跡 3 奥村廃寺跡 近景 (西から)
4 奥村廃寺跡 近景 (南から)
写真図版 3 遺構 調査地 全景 (西から)
6 挖立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根 断面 (南西から)
写真図版 4 遺跡 7 奥村廃寺跡周辺 遠景 (真上から)
8 奥村廃寺跡 遠景 (西から)
写真図版 5 遺跡 9 調査地 全景 (東から)
写真図版 6 遺構 10 調査地 遠景 (東から)
11 調査地 全景 (東から)
写真図版 7 遺構 12 調査地 全景 (西から)
13 挖立柱建物SB01 (西から)
写真図版 8 遺構 14 挖立柱建物SB01・SB02 (東から)
15 挖立柱建物SB01 (南から)
写真図版 9 遺構 16 挖立柱建物SB03 (南から)
17 挖立柱建物SB02 (南西から)
写真図版 10 遺構 18 柱穴P07 断面 (南から)
19 柱穴P07 磚石 (東から)
写真図版 11 遺構 20 挖立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根 検出状況 (南西から)
21 挖立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根 断面 (南西から)
写真図版 12 遺構 22 清SD01 断面 (西から)
23 清SD02 断面 (南から)
24 2 区 全景 (南東から)
写真図版13 遺物 確認調査区出土 瓦 1
写真図版14 遺物 確認調査区出土 瓦 2
写真図版15 遺物 確認調査区出土 瓦 3
写真図版16 遺物 本発掘調査区出土 瓦・土器 1
写真図版17 遺物 本発掘調査区出土 瓦 2
写真図版18 遺物 本発掘調査区出土 瓦 3
写真図版19 遺物 挖立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境（図版1・3）

奥村廃寺跡は兵庫県たつの市神岡町奥村・北横内に所在する。

たつの市は、兵庫県の西部に位置しており、南は瀬戸内海に面し、東は姫路市と揖保郡太子町、北は宍粟市、北西は佐用郡佐用町、西は赤穂郡上郡町と相生市に接している。

奥村廃寺跡は揖保川と揖保川水系林田川との間に位置している。揖保川は宍粟市藤無山（標高1,139m）に源を発し、林田川は雪彦山塊に源を発し、南流している。揖保川と林田川との間は約2km～約5kmの幅の狭い山腹となっており奥村廃寺が所在するたつの市神岡町で、山腹は途切れる。たつの市神岡町から下流の南側は2・3の独立丘陵が存在しているが、沖積平野が広がっている。揖保川と林田川は奥村廃寺の下流約10kmのたつの市揖保町で合流しており、姫路市網干区で瀬戸内海に注いでいる。たつの市における揖保川と揖保川水系林田川の隆起活動は弱く、たつの市神岡町で低い河岸段丘が僅かに存在する程度である。

奥村廃寺の上流約11kmの宍粟市山崎町には東西に走る山崎断層が存在している。また、奥村廃寺の下流約3kmにはたつの市街を東西に走る龍野一上郡断層が存在しており、たつの市街の北側は標高100m以上の山地が広がっているが、南側は沖積地が広がっている。

奥村廃寺跡は標高167.8mの愛宕山の南麓の扇状地に位置している。愛宕山は中生代後期白亜紀の相生層群赤穂（伊勢）累層の薺崎流紋岩質凝灰岩および凝灰岩質頁岩・砂岩を基盤とする丘陵である。奥村廃寺跡が存在する平坦地は新生代第四紀の氾濫原であり、周辺には旧流路の痕跡が残る。旧流路の痕跡は0.5m未溝がほとんどで、高低差があつても1m前後までである。

鉄道は姫路と岡山県新見を結ぶJR姫新線の東脇崎駅が奥村廃寺跡の西側約1kmにある。道路は奥村廃寺跡の今回調査地点のすぐ北側を一般県道姫路新宮線が東西に走り、古代美作道がすぐ南側を東西に走っていることから、奥村廃寺跡周辺は古代より交通の要衝であったことがわかる。

第2節 歴史的環境

奥村廃寺跡はたつの市東部の揖保郡に所在する。今回中心となる遺物は古代の遺構・遺物である。したがって、奥村廃寺跡周辺地域の古代を中心に、前後の時代も含めて概観する。

1. 古代の奥村廃寺跡周辺

奥村廃寺跡が存在した奈良時代において、この地域は播磨国揖保郡に所在していた。『播磨國風土記』によれば、揖保郡には18里が記載され、奥村廃寺周辺は上岡里に比定されている。上岡里はもと林田里に含まれており、後に分離・独立した。平安時代の『倭名類聚抄』には揖保郡は18郷ないしは19郷が記載され、奥村廃寺周辺は上岡郷に比定されている。揖保郡衙は『播磨國風土記』の記述の順序から日下部里に存在していたと考えられ、揖保川右岸の小神周辺が想定される。

なお、平城京第281次調査で、平城京左京二条二坊十・十一坪の奈良時代中頃以前に位置付けられる二条条路北側溝SD7090Aから「上岡里人口□□口〔廣庭カ〕」と墨書きされた木簡が出土している。

『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条には播磨国に9駅の存在が記載され、奥村廃寺の南側には古代美作道が東西方向に推定されている。奥村廃寺は古代美作道が古代山陽道から分岐する草上駅家と越部駅

家との間に位置する。草上駅家は姫路市今宿遺跡周辺を比定し、越部駅家はたつの市新宮町黄崎天満遺跡やたつの市新宮町馬立遺跡が想定されているが、明確ではない。奥村庵寺の南側約3kmには古代山陽道が東西方向に一直線に走っており、布勢駅家である小犬丸遺跡の調査が行われている。駅館院は礎石瓦葺、朱塗り白壁であったことが判明している。また『延喜式』神名帳に記載のあるいわゆる式内社は揖保郡に7座あり、北北東2kmに祝田神社が鎮座している。なお、播磨国一宮は揖保川上流の宍粟市一宮町に伊和坐大名持御魂神社がある。

播磨国府は『倭名類聚抄』に「国府、在飴磨郡」とあり、播磨国府・播磨国分寺・播磨国分尼寺はいずれも揖保郡の東隣りの飴磨郡に所在している。播磨国府は姫路市本町遺跡に推定されており、播磨国分寺・播磨国分尼寺は市川左岸に位置する。

揖保郡の古代寺院は奥村庵寺のほかに、古代美作道沿いに越部庵寺・栗栖庵寺が存在している。古代美作道より北に香山庵寺が存在している。古代山陽道沿いに中井庵寺・小神庵寺・中垣内庵寺・小犬丸中谷庵寺が一里一箇寺で存在している。古代山陽道より南に姫路市下太田庵寺・金剛山庵寺が存在している。小神庵寺は、揖保郡はもとより播磨でも最古の寺院の一つであり飛鳥時代に造る瓦が出土している。

また古代山城である城山城は古代山陽道の北側にあり、古代美作道の西側に位置し、揖保川の西の山頂に立地していることから、要衝であったことが判る。

古代の集落は奥村庵寺跡北東の上横内遺跡で奈良時代の掘立柱建物群が調査されている。日下部里内に推定されている小神芦原遺跡では約40棟の掘立柱建物が調査されている。西側に位置する小神辻の堂遺跡では墨書き土器が出土している。

奥村庵寺跡周辺の条里地割は圃場整備や宅地化などの開発で失われた地区も多いが、広い範囲に北から西に約4°振る正方位の条里地割が残っている。

古代における須恵器生産をはじめとする窯業は揖保郡東部から飴磨郡西部にかけて群集している。青山窯跡群・桜井窯跡群・打越窯跡群・大池窯跡群・赤坂窯跡群・峰相口窯跡群などが存在しており、打越窯跡と赤坂1号窯跡からは鰐尾が出土している。

中井庵寺の東側150mに位置する中井瓦窯跡はロストル式の平窯で、製品は中井庵寺の補修用に供給されている。なお、奥村庵寺所用の瓦を焼成した窯は見つかっていない。

2. 奥村庵寺以前の周辺の歴史

旧石器時代から奥村に寺が建つ以前の奥村庵寺跡周辺について簡単に概観する。

旧石器時代の遺跡は碇岩南山遺跡で調査が行われている他は、他の時代に混入した石器や採集品である。碇岩南山遺跡では2群に分かれた石器類ブロックが姶良In火山灰より上層で検出された。太子町坊主山遺跡からは国府型ナイフ形石器と有舌尖頭器が出土している他、皿池遺跡で数点の石器が採集されているにすぎない。

縄文時代は、奥村庵寺跡で縄文土器の出土がある他、付近では横内遺跡で縄文土器が出土し、皿池遺跡や奥池遺跡で石器が採集されている。

周辺では縄文時代草創期や早期の遺跡の調査は行われていない。前期の遺跡はたつの市内では片吹遺跡で前期末の土坑を検出しており、中期・後期・晩期にかけて継続している。中期の遺跡はたつの市内では片吹遺跡・清水遺跡があり、中期末の竪穴住居を調査している。太子町平方遺跡では竪穴住居や土坑・ピットを調査し、石棒や石鐵などの石器や土器が多量に出土している。後期になると平野部における遺跡

数が急増している。片吹遺跡・太子町東南遺跡で堅穴住居を調査している他、舍利田遺跡・太子町平方遺跡・太子町城山遺跡などで遺物が出土している。晚期は門前遺跡・太子町東南遺跡・太子町立岡遺跡・太子町助久五反畑遺跡・太子町平方遺跡・太子町城山遺跡・太子町常全遺跡などで土坑や遺物が出土している程度で堅穴住居は検出されていない。

弥生時代の遺跡は、付近では弥生時代前期から続いて中期に隆盛する住居跡・土坑・墓坑を調査した横内遺跡がある。弥生時代前期の遺跡は少なく、たつの市内では門前遺跡・横内遺跡・新宮宮内遺跡などの調査が行われているが、土坑や構造を検出したのみで、堅穴住居は見つかっていない。丘陵上の半田山墳墓群からは土器棺が見つかっている。

中期になると遺跡は急増し、揖保川の平野部のいたる所で発見されている。北龍野遺跡・小神辻の堂遺跡・清水遺跡・北山遺跡・尾崎遺跡・長尾谷遺跡・福田片岡遺跡・新宮宮内遺跡などがあり、中期後半には寄井遺跡・養久山・前地遺跡・龍子向イ山遺跡・竹原中山遺跡などがあり、丘陵上に遺跡が出現する。

墓は新宮宮内遺跡で周溝墓を検出しており、福田天神遺跡では土器棺が3基調査されている。

弥生時代後期初頭には小神辻の堂遺跡があり、後期の遺跡では太子町立岡遺跡・太子町亀田遺跡などで堅穴住居を検出している。墓は半田山墳墓群があり、太子町常全日連寺遺跡で土器棺墓4基を検出している。

揖保郡では銅鐸は出土していないが、揖保川上流の宍粟市で青木銅鐸と須賀沢銅鐸が出土している。青木銅鐸は古段階の外縁付鉢2式4区袈裟棒文銅鐸である。須賀沢銅鐸は最新段階の突線付鉢3式で近畿Ⅱ式の袈裟棒文銅鐸で、江戸時代の寛政2年（1790）に出土し、『集古十種』や『弘仁曆運記考』の古記録に記載されている。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての墳墓は半田山墳墓群や白鷺山・養久山墳墓群などが丘陵上に存在している。北山遺跡では方形周溝墓が調査されている。

前期古墳はたつの市内では養久山1号墳・景雲寺古墳・権現山51号墳・龍子三ツ塚古墳群や吉島古墳などが平野を見下ろす丘陵上に立地し、密度が高い。中期古墳は数が減少し規模が小さくなる。片島1号墳・中垣内天神山1号墳など帆立貝形や小型の前方後円墳があるので様相が一変する。この他、黍田古墳群など小規模な古墳の調査が行われているにすぎない。

後期の前方後円墳は、揖保川右岸に西宮山古墳があり、西側に播磨冢古墳が存在するが、多くは横穴石室の群集墳である。奥村施寺北西の谷地形の山麓に56基の大規模な大住寺古墳群が存在し、愛宕山山麓に愛宕山古墳群（2基）が存在している。揖保川上流左岸には曾我井北山古墳群（3基）・曾我井赤堀古墳群（5基）が存在し、右岸には馬立古墳群（32基）・馬立平山南古墳群（6基）・馬立南山下古墳群（11基）・はっちょう塚古墳群（11基）などが存在している。林田川下流には中井古墳群（2基）などが山上や丘陵上に存在している。

この他に、平野部でも古墳を検出しており、太子町常全遺跡で削平された横穴式石室墳・宝林寺北遺跡で土坑墓が調査されている。

古墳時代初頭の集落遺跡は片吹遺跡・小神辻の堂遺跡・北山遺跡・小畠十郎殿谷遺跡などがあり、堅穴住居を検出している。いずれも弥生時代から継続しており、この時期に集落規模が拡大する。古墳時代前期の集落遺跡は尾崎遺跡で堅穴住居を検出している。古墳時代中期の集落は竹万遺跡で掘立柱建物を検出している。古墳時代後期の集落は養久山・前地遺跡・南山高屋遺跡で掘立柱建物を検出している。長尾・小畠遺跡・太子町鶴石田遺跡で堅穴住居を検出している。

古墳時代の生産遺跡は碇岩朝地窯跡群や那波野丸山窯跡群・中井鴨池窯跡があるが、多くは未発見である。

3. 奥村廃寺以後の周辺の歴史

中世以降の奥村廃寺跡周辺について簡単に概観する。

中世前期には、上岡郷を継承して神岡荘が成立する。神岡荘の成立年代・本家・領家などは不明である。横内遺跡では掘立柱建物が調査されている。

中世には大徳寺領小宅荘と一条院領弘山荘に含まれる宮脇遺跡、法隆寺領鶴荘と弘山荘に含まれる福田片岡遺跡、鶴荘に含まれる福田天神遺跡、弘山荘に含まれる立岡遺跡・阿曾北遺跡・阿曾南遺跡、新熊野社領浦上荘に含まれる宝林北遺跡などの遺跡で掘立柱建物が調査されている。

揖保川河口付近に位置する姫路市古網干遺跡は中国製磁器や広域の国産陶器が多量に出土し、港津関係の遺跡と推定される。

墓は宮脇遺跡と宝林北遺跡で方形区画墓・集石土坑・火葬墓が調査されている。

中世の寺院跡としては鶴荘内の斑鳩寺に関連する円勝寺跡がある。円勝寺周辺には筆山経塚があり、出土した経筒が斑鳩寺に伝えられている。

筑紫大道（中世山陽道）は東南遺跡の北約1.7kmの福田片岡遺跡・平方遺跡で調査されている。

南北朝時代には赤松氏の本城城山城が古代城山城の後に築かれた。嘉吉元年（1441）には嘉吉の乱が起り、赤松満祐が最後の拠点として城山城で討死した。

調査地点は、江戸時代初期の元和3年（1617）に林田藩領になり、幕末に至った。幕末までに横内村から分村して北横内村が成立した。明治4年（1871）の廃藩置県により、林田県となり、同年府県統合で改置姫路県に合併された。その後、飾磨県と改称し、兵庫県となった。明治22年の市制町村制施行により、北横内村は横内村・上横内村・西横内村・大住寺村・奥村・東觜崎村・沢田村・入野村・田中村・寄井村・西鳥井村・追分村・野部村・筒井村が合併して揖東郡神岡村が発足した。明治29年には揖東郡と揖西郡が合併し揖保郡となった。昭和26年には龍野町を核に神岡村をはじめとして揖西村・揖保村・善田村が合併して龍野市となった。更に平成17年10月、龍野市と揖保郡新宮町・揖保川町・御津町の1市3町の合併によりたつの市となった。

第2章 調査の契機と経過

第1節 調査に至る経緯（図版4）

1. 調査の契機

兵庫県土木部竜野土木事務所では一般県道姫路新宮線（当時、新宮迫分線）緊急地方道路整備事業をたつの市神岡町北横内において進めている。姫路新宮線は姫路市西夢前台2丁目からたつの市新宮町新宮を結ぶ総延長約11.563kmの一般県道である。途中、姫路市鯉西で主要地方道姫路上郡線と、姫路市石倉へたつの市神岡町追分にかけて国道29号と重複している。たつの市神岡町北横内では交通渋滞の緩和と歩行者の安全を確保するため、龍野市道沢田1号線の改良（龍野市施工）に伴う県道交差部の交差点改良および歩道設置を行うこととなった。

この事業対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である奥村廃寺跡の範囲内を東西に走る県道であり、すでに龍野市教育委員会が周辺で調査を行っており、白鳳時代創建の金堂と東西塔が直線的に並ぶ伽藍を確認している。

龍野市（当時）が施工する市道沢田1号線の改良部分については、すでに龍野市教育委員会が記録保存で対応することとされた。また、龍野市教育委員会は奥村廃寺跡の史跡指定は将来的に考えていないこと。以上のことから、工事内容が現道の道路改良であり、工事による損傷も軽微であると思われることから、計画変更の要請は行わず、記録保存で対応することとした。ただし発掘調査の結果、重要な遺構が見つかった場合、工法変更などを土木側と検討することとした。

発掘調査は、用地買収の契約事務や用地の登記が完了する平成11年12月に調査を実施することとし、確認調査の結果、本発掘調査が必要であれば、物件の移転が完了する平成13年1月から調査を行うこととした。龍野市教育委員会もほぼ同時期に調査を実施した。

2. 奥村廃寺跡の既往の調査

奥村廃寺が周知されたのは、瓦が出土した1979年ごろとされている。その後、県営圃場整備事業や民間開発に伴う発掘調査が行われている。

(1) 県営圃場整備事業に伴う調査

1985年度から1986年度にかけてと1987年度に、龍野市教育委員会は県営圃場整備事業に先立ち、事前の寺域範囲確認調査を行った。この調査は広域に行っており、奥村廃寺跡の大略は判明し、金堂と東塔、北と東および南の寺域範囲も想定できた。範囲は瓦葺き築地や溝などの推定で150m四方と推定された。瓦も膨大な量が出土し、多数の型式が明らかになった。

1987年度には、金堂の北側で講堂と思われる礎石を確認しており、山際まで寺域が延びていることが判明した。

(2) 民間開発に伴う調査

1989年度と1990年度には、龍野市教育委員会は民間開発に伴う調査を行った。

1989年度には農業用倉庫建設に伴い、前回の調査で明らかになった金堂の西側の発掘調査を行い、新たな心礎の発見があった。これによって、金堂を中心に東西兩塔、背後に講堂を置く伽藍配置が明らかとなつた。さらに西側では僧房と思われる南北棟の掘立柱建物を検出した。

1990年度には県道の南側でパチンコ店舗などの建設に伴い、伽藍南西部の発掘調査を行ったが、明らか

な遺構は検出していない。

(3) 市道沢田1号線改良工事に伴う調査

今回報告する兵庫県教育委員会が行った一般県道姫路新宮線改良に伴う調査とほぼ同時期の2001年1月から3月にかけて龍野市教育委員会が、市道沢田1号線改良工事に伴う発掘調査を行った。調査時点では既往ではないが、すでに報告書が刊行されているためここで簡単に触れる。調査地点は今回報告を行う南側に位置する。

発掘調査は南北調査区と北半調査区の2回に分けて1,700m²の調査を実施した。南北調査区は遺構・遺物の量が少なく、寺域が広がらないことが判明した。北半調査区は掘立柱建物や幡竿支柱など寺関係の遺構の存在が明らかになった。

(4) 既往調査の報告

1985年度・1986年度・1987年度の県営圃場整備事業に先立ち、事前の寺域範囲確認調査と1989年度・1990年度の民間開発に伴う調査の成果をまとめた概要報告書が、1997年度に刊行された（『奥村廃寺－調査の概要と出土瓦の研究－』龍野市文化財調査報告18）。遺構の概略と今里幾次による古瓦の論考を掲載している。

2000年度の市道沢田1号線改良工事に伴う調査の成果は2002年度に刊行された（『奥村廃寺II－市道沢田1号線改良工事に伴う寺城南東部の調査報告書－』龍野市文化財調査報告24）。

(5) 奥村廃寺の概要

奥村廃寺は7世紀末ごろに創建され、ほぼ8世紀末まで存続した古代寺院である。伽藍配置は、中心に金堂を置き、その東西に二つの塔を並立させることができた。背後には講堂と推定される礎石群がある。金堂と東西両塔がほぼ直線的に並ぶ例は、常陸新治廃寺、丹波三ツ冢廃寺に次いで全国3例目という特異なものである。中枢部の伽藍配置はほぼ明らかとなったが、寺院の全体像は西塔西側に僧房建物が存在する以外は不明である。寺域の南には古代美作道が想定されている。

出土瓦の研究では、多数の軒平瓦に指かれた手書きバルメットや瓦と須恵器製作技術との共通性が指摘され、また高句麗・新羅系の色合を表す軒丸瓦などから淡来人との関わりが強く窺われる。同時代史料である『播磨国風土記』にも淡来人の記載が多い。奥村廃寺から出土した多量の瓦を観察することで、その瓦工は播磨府系瓦の創出に技術面から参画したことを見定させ、地方における官窯発生過程を考察する手掛かりを提供したと言える。

第2節 発掘調査の経過（図版4）

本事業に伴う奥村廃寺跡の確認調査を平成11年度に実施し、本発掘調査を平成12年度に実施した。

1. 確認調査（遺跡調査番号990283）

事業計画およびそれに伴う用地買収を受け確認調査を実施した。

平成11年度

県道の南側の確認調査は龍野市道沢田1号線の新たな交差点を中心に東西4箇所で行った。4m×1.5mの調査区を3箇所（1G・2G・4G）と1m×1mの調査区を1箇所（3G）の合計4箇所の調査を行った。調査期間は、平成11年12月21・22日。調査面積は13m²であった。

調査の結果、2Gで時期不明の構を検出し、東端の調査区4Gで粘土取りの擾乱坑が存在し、奥村廃寺

所用の軒丸瓦を含む瓦類が出土している。この結果と龍野市教育委員会が過去に調査を行った成果から、現龍野市道沢田1号線との交差点から西側で本発掘調査が必要であると判断した。瓦が出土した東端の調査区4G周辺は粘土取りで搅乱が著しいとの、幅が狭いため本発掘調査が無理であると判断した。

2. 本発掘調査（遺跡調査番号2000280）

確認調査の結果を踏まえ、本発掘調査を平成12年度に実施した。

平成12年度

本発掘調査は龍野市道沢田1号線との交差点の東西約50mを範囲として実施した。発掘調査により、奥村磨寺の一画であることが判明し、奈良時代～平安時代の掘立柱建物や溝などの遺構と時期不明の遺構を検出した。

調査期間は、平成13年1月22日～平成13年3月12日。調査面積は376m²であった。同時期に、南側の隣接地で龍野市道沢田1号線改良工事に伴う本発掘調査を龍野市教育委員会が実施している。

発掘調査の組織

平成11年度

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

副所長 大村敬通

総務課 課長 岩澤俊雄

企画調整班 調査専門員 山本三郎

調査担当 企画調整班 主任 多賀茂治

平成12年度

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 大村敬通

企画調整班 主任調査専門員 井守徳男

主査 高瀬一嘉

総務課 課長 森 俊雄

調査第4班 調査専門員 西口和彦

調査担当 調査第4班 主査 村上泰樹

主査 篠宮 正

調査補助員 小谷義男・森崎由起子

第3節 出土品整理の経過

出土品整理は、平成20年度単年度に兵庫県立考古博物館で実施した。

出土遺物の水洗・注記は兵庫県立考古博物館魚住分館で実施し、接合以降は兵庫県立考古博物館で実施した。出土遺物の接合・補強を行った後、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、土器・瓦・木製品の実測を行った。また瓦の拓本を行った。土器の復原を行い、瓦・木製品と合せて遺物の写真撮影

を行い、写真を整理した。また、木製品の保存処理を行った。遺構図はトレースが行えるように補正し、実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。出土品の分析は、木製品の樹種同定を株式会社古環境研究所に依頼した。

原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

出土品整理の組織

平成20年度

調査主体 兵庫県教育委員会

整理事務 兵庫県立考古博物館

館長 石野博信

副館長兼総務部長 藤原 恵

総務課 課長 若狭健利

課長補佐 山下裕惠

埋蔵文化財調査部 部長 若生晃彦

主幹 岡崎正雄

整理保存班 調査専門員 森内秀造

主査 菊田淳子

整理担当 整理保存班 主査 篠宮 正

非常勤嘱託員 佐伯純子・眞子ふさ恵・吉田優子・島村順子・奥野敦子・

三好綾子・荻野麻衣・谷脇里奈

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

確認調査結果を受け、本発掘調査を平成12年度に実施した。

当調査区は、7世紀末から奈良時代にかけて存続したとされている古代寺院奥村廃寺の東南端部分に該当する。県道の整備に伴う調査のため、調査区の北側は県道と接しており、東側は市道と接している。また、龍野市教育委員会が同時期に調査を実施した龍野市道沢田1号線建設の調査地点は、今回の調査区の南側に接している。

調査区の形態は東西に長く、旧畠地のコンクリート擁壁を境に東側を1区、西側を2区と呼称した。1区は352m²、2区は24m²である。検出面の標高は1区が39.2m前後、2区が38.6m前後である。

1区は調査前には宅地で道路建設に際して建物が移転した。このため、遺構面に影響のある搅乱坑が多数存在した。

2区は擁壁を作り盛土を行い、畠地を嵩上げしており、下層に古い擁壁が存在している。

第2節 遺構

調査の結果、耕土直下から遺構を検出した。検出した遺構は古代の掘立柱建物（SB01・SB03）が2棟と溝が1条（SD02）が確認でき、奥村廃寺の実態解明に新たな資料が加わることとなった。

この建物以外に中世段階（SB02）と考えられる掘立柱建物を確認した。さらに時期不明の柱穴を多数検出したほか、溝1条（SD01）を検出した。

遺構からの出土遺物は少なく、搅乱土坑から瓦などが出土している。

1. 1区

SB01（図版8 写真図版8）

検出状況 調査区の西端に位置する。建物の南西隅柱穴は調査区外に位置し、西側桁行柱のひとつは、搅乱を受けている。建物跡北端のP11とP14の間に棟持柱がないことから、建物はさらに北側道路部分に延びると判断できる。

形状・規模 桁行方位をN 1° E による南北揃の側柱建物跡である。桁行南北3間（9.14m）以上、梁行東西2間（5m）の規模である。建物の柱間は、桁行方向の柱間はP08～P09間が354cm、P09～P10間が280cm、P10～P11間280cm、P13～P14間280cmで、柱間は南端が長い。梁行の柱間は、P08～P12間が230cmである。

柱 穴 方形を基本としている。柱穴P11は掘形の一辺が80cm×50cm以上、深さは55cm、柱痕跡は直径約24cmを測る。柱穴P10は掘形の一辺が73cm×62cm、深さは54cm、柱痕跡は直径約24cmを測る。柱穴P09は掘形の一辺が73cm×70cm、深さは23cm、柱痕跡は直径約20cmを測る。柱穴P08は掘形の一辺が83cm、深さは28cm、柱痕跡は直径約30cmを測る。柱穴P12は掘形の一辺が88cm×73cm、深さは12cm、柱痕跡は直径約24cmを測る。柱穴P13は掘形の一辺が105cm×103cmの方円形で、深さは33cm、柱痕跡は直径約24cmを測る。柱穴P14は掘形の一辺が75cm×65cm以上、深さは60cm、柱痕跡は直径約25cmを測る。

出土遺物 柱穴P13の掘形内より布目のある平瓦片が出土した。

SB03（図版9 写真図版9~11）

検出状況 調査区の中央部東よりに位置する。柱穴列が南側に延びないため、建物はさらに北側道路部分に続くと判断できる。

形状・規模 梁行方位をN 5° Eにとる南北棟の側柱建物跡と考えられる。桁行南北1間（2m）以上、梁行東西1間（4.15m）の規模である。柱穴の規模や深さから柱穴P07とP05が主柱穴と考えられる。柱穴P07の西側に接している柱穴P16と柱穴P05の南東に接している柱穴P04は脇柱と考えられる。

柱 穴 柱穴P07は掘形の直径が60cm～65cm、深さは47cmである。掘形の底には中轍と平坦な礎石が設置されており、柱痕跡は直径約28cmを測る。柱穴P07の西側にはP16が存在している。掘形の直径が40cm～48cm、深さは26cm、柱痕跡は直径約18cmを測る。

柱穴P05は掘形の直径が50cm～55cm、深さは61cmである。掘形の中央に上部が腐朽した柱が残存しており、長さ47.0cm、最大径22.9cmを測るスギの芯持ち材である。柱穴P05の南東側にはP04が存在している。掘形の直径が45cm～57cm、深さは42cmである。掘形の中央にやや西に傾いて上部が腐朽した柱が残存しており、長さ64.0cm、最大径17.8cmを測るスギの芯持ち材である。

出土遺物 柱穴P07の掘形内より須恵器碗が出土した。

SB02（図版10 写真図版8・9）

検出状況 調査区の中央部分、SB01の東側に位置する。柱穴列が南側に延びないため、建物はさらに北側道路部分に延びると判断できる。

形状・規模 桁行方位をN 1° Wにとる南北棟の側柱建物跡である。南北1間（2.2m）以上、東西2間（5m）の規模である。東西方向の柱間は290cmと210cmで、柱間は一定ではない。

柱 穴 円形を基本としている。柱掘形の直径は28cm～40cm、深さは8cm～20cm、柱痕跡は直径約15cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土していない。

SD01（図版10 写真図版12）

検出状況 調査区中央部南側において検出した。東側は調査区外に延び、西側は同時に調査を実施した龍野市教育委員会の調査区に延びる。

形状・規模 東西方向に走り、N 72° Eを向く。幅40cm、深さ5cmを測る。断面形は浅いU字形呈している。

埋 土 埋土は黄褐色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 土器の小片が出土したが、図示できる遺物はない。

SD02（図版10 写真図版12）

検出状況 調査区北西端において検出した。SB01の中央部分に位置し、北側は調査区外に延び、南側は傾斜のため削平を受け消滅している。

形状・規模 南北方向に走りN 2° Eを向く。幅57cm、深さ13cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋 土 埋土は黒褐色小藻混じリシルト質細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、須恵器壺B蓋と平瓦が出土した。

搅乱坑

検出状況 調査区北西端の縁際で検出した。SB01の北東部分に位置する。

形状・規模 直径1.5m程度の不整円形である。

埋土 埋土は灰黄褐色シルト質極細砂やにぶい黄褐色シルト質極細砂が混じった土層である。

出土遺物 須恵器鉢、丸瓦、平瓦が出土した。

2. 2区(図版7 写真図版12)

1区の西側の擁壁を境に位置している。現県道に沿った東西に細長い調査区である。東西8m、南北3mを測り、面積は24m²である。全体に旧耕作土上に約1.35mの盛土を行っている。遺構検出面は旧耕作土直下の標高37.2mである。壁面は安全勾配を探ったため、調査の有効面積は6.5m²である。

検出した遺構は中央部で柱穴1本のみである。2区は1区に比べて遺構検出面が約80cm低いため、全体的に遺構が削平された可能性が高い。遺物は出土しなかった。

第3節 遺物

1. 確認調査

確認調査4G(1~10)

確認4Gの搅乱坑から軒丸瓦・丸瓦・平瓦が出土した。

軒丸瓦1は瓦当面下部約1/2の破片である。複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当面径は15.6cm、厚さ3.8cmを測る。中房は直立し、直径5.0cm、中房厚は3.5cm、瓦当面からの高さ2.0mmを測る。中房内の蓮子は1+4+6の不規則な配置であり、うち中心を欠き、1+2が遺存する。蓮弁は弁端が丸く、僅かに弁端が高まるが、中房程度の高さしかない。蓮弁幅3.0cm、連弁長3.2cmを測る。子葉は弁端近くまで達しており、盛り上がりは低い。子葉幅0.9cm~1.1cm、子葉長2.7cmを測る。間弁は楕状を呈し、中房まで達する。弁端は中房程度の高さがある。外縁は直立する平縁で、幅1.4cm、高さ6.5mmを測る。型範から外した後、直径3.0mm、深さ2.5mm~4.0mmの竹管文を刺突している。1.1cm~2.1cm間隔で施しておらず、15個残存している。瓦当面の型範には木目痕が僅かに残るほか、子葉の一部に布目が残存している。丸瓦との接合部が僅かに残る。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

丸瓦2は行基式の丸瓦で、狭端面と右側面が残っている。凸面・凹面ともに磨滅のため調整痕は明瞭ではない。側面は凹面側を深く削り込んで、鋭角に作っている。狭端部凹面はケズリ調整を行っている。焼成は軟質であり、色調は灰白色である。

平瓦は7点(3~9)を図化した。

平瓦3は狭端面と右側縁が残っている。厚さ2.1cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は左上がりの平行四辺形で不揃いである。凹面は布目痕跡(タテ8本/cm・ヨコ8本/cm)と粘土板の切り離し痕跡が残る。側面は凸面側・凹面側とともに面取りして丁寧に仕上げている。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

平瓦4は狭端面と左側縁が残っている。粘土板巻作りで、厚さ2.3cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、不揃いの平行四辺形である。凹面は布目痕跡(タテ9本/cm・ヨコ7本/cm)と粘土板痕跡が残る。側面は凸

面側・凹面側ともに面取りしている。焼成はやや軟質であり、色調は灰白色である。

平瓦5は右側縁が残っている。粘土板捲巻作りで、厚さ1.9cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、不揃いの平行四辺形である。凹面は布目痕跡（タテ11本/cm・ヨコ9本/cm）が残る。側面は凸面側・凹面側ともに面取りして丁寧に仕上げている。焼成は硬質であり、凹面に自然釉がかかっており、色調は灰白色である。

平瓦6は広端面と右側縁が残っている。粘土板捲巻作りで、厚さ2.2cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、不揃いの平行四辺形である。多方向から叩いている。凹面は磨滅が著しいが、布目痕跡（タテ11本/cm・ヨコ8本/cm）と枠板痕跡が残る。側面は凸面側・凹面側ともに面取りしている。焼成はやや軟質であり、色調は灰白色である。

平瓦7は広端面が残っている。粘土板一枚作りで、厚さ2.4cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、不揃いの平行四辺形である。多方向から叩いている。凹面は磨滅が著しいが、布目痕跡（タテ8本/cm・ヨコ6本/cm）と枠板痕跡と粘土板の切り離し痕跡が残る。焼成はやや軟質であり、色調は灰白色である。

平瓦8は左側縁が残っている。粘土板一枚作りで、厚さ2.2cmを測る。凸面は繩叩き目でやや左上がりの斜め方向である。繩叩き目は荒く、深い繩目の単位が明瞭である。凹面は布目痕跡（タテ10本/cm・ヨコ9本/cm）と粘土板の切り離し痕跡が残る。側面は磨滅が著しい。焼成は軟質であり、色調は灰白色である。

平瓦9は広端面と左側縁が残っている。粘土板捲巻作りで、厚さ2.8cmを測る。凸面は横方向の強いナデを行っている。凹面は布目痕跡（タテ7本/cm・ヨコ6本/cm）と枠板痕跡と粘土板の切り離し痕跡が残る。側面は凸面側・凹面側ともに面取りして丁寧に仕上げている。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

隅平瓦10は右側面全体と斜端面と広端面が残っている。右側面は短側面で、長さは8.2cmを測る。粘土板捲巻作りで、厚さ2.1cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は左上がりの平行四辺形で不揃いである。凹面は布の繋ぎ目を境に二種類の布目痕跡（タテ9本/cm・ヨコ7本/cm、タテ13本/cm・ヨコ10本/cm）と枠板痕跡が残る。側面は凹面側を面取りして丁寧に仕上げている。斜端面はヘラによる切り離し痕跡が残る。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

2. 本発掘調査

SD02 (11・12)

構SD02からは須恵器と瓦が出土した。須恵器坏B蓋11は天井部から口縁端部にかけての破片で、口縁端部は短く垂下している。外面は回転ヘラ切りの後、軽くナデしている程度で丁寧ではない。内面は口縁端部から約2cmの部分の外側に灰白色の自然釉がかかっている。これは坏身を正位置に、蓋を反転させ重ねて窯詰めした様子が復原できる。ちなみに坏Bの高台は直径11cm程度に復原できる。

平瓦12は広端面の一隅が残っている。粘土板一枚作りで、厚さ1.8cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、不規則である。凹面は布目痕跡（タテ7本/cm・ヨコ6本/cm）が存在している。広端面側は端面をケズリ調整し、凹面側は大きくケズリ調整し面取りをしている。右側面側は側面をケズリ調整し、凸面側・凹面側ともにケズリ調整し面取りをしている。焼成は軟質であり、色調は灰黄色である。

SB03-P07 (13)

掘立柱建物SB03の柱穴P07からは須恵器碗13が出土した。口縁部の破片で、外方へ開き立ち上がる。口縁外側には重ね焼時の変色部が存在する。内外面とも右回転ナデ調整である。

SB01-P13 (14)

掘立柱建物SB01の柱穴P013からは平瓦14が出土した。広端面が残っている。粘土板桶巻作りで厚さ2.0cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、ナデ清しており、一部布目痕跡が残る。凹面は布目痕跡（タテ11本/cm・ヨコ9本/cm）と粘土板痕跡が存在している。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

SB03-P04 (W 1)

柱W 1は掘立柱建物SB03の柱穴P05に遺存していた柱の一部である。長さ47.0cm、最大径22.9cmを測るスギの芯持ち材で、筍状に腐朽している。表面は腐朽して、加工痕跡は存在しない。底面は切り離しの加工痕跡が僅かに認められるが、腐朽のため、明瞭ではない。年輪幅は1.5cm～0.8cmと広く、28年分が認められる。

SB03-P05 (W 2)

柱W 2は掘立柱建物SB03の柱穴P05に遺存していた柱の一部である。長さ64.0cm、最大径17.8cmを測るスギの芯持ち材で、筍状に腐朽している。表面は腐朽して、加工痕跡は存在しない。底面は切り離しの加工痕跡が僅かに認められるが、腐朽のため、明瞭ではない。年輪幅は0.7cm～0.3cmと広く、18年分が認められる。

遺構に伴わない遺物（16～18）

遺構に伴わない遺物は16・17が東端から、18が西端から出土した。須恵器壺16は口縁部の破片で口縁部は外反している。須恵器壺17は底部の破片で底部端を突出させて平高台を作っている。須恵器壺18は底部の破片で外面は回転ケズリの調整後、突出した高台を貼り付けている。

攪乱坑（15・19～35）

攪乱坑からは須恵器と瓦が出土した。

須恵器鉢19は底部にヘラによる刺突があり、内面・底部ともに磨滅が著しく良く使用している。

丸瓦は5点（20～24）を図化した。

丸瓦20は左側面が残っているのみで、両端面は残っていない。内径は10.7cmに復原できる。凸面は縱方向のナデ調整を行い、凹面は布目痕跡（タテ11本/cm・ヨコ11本/cm）が残る。側面は1/2にヘラで切り離した痕跡をそのまま残し、未調整である。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

丸瓦21は左側面近くが残っているのみで、両端面は残っていない。内径は14.0cmに復原できる。凸面は縱方向のナデ調整を行い、凹面は布目痕跡（タテ9本/cm・ヨコ9本/cm）と粘土板の切り離し痕跡が残る。側面は凹面側を面取りしている。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

丸瓦22は左側面が残っているのみで、両端面は残っていない。内径は14.5cmに復原できる。凸面・凹面ともに磨滅のため調整痕は明瞭ではないが、凹面に微かに布目痕跡が残る。側面は凹面側を面取りしている。焼成は軟質であり、色調は灰白色である。

丸瓦23は左側面が残っているのみで、両端面は残っていない。内径は12.5cmに復原できる。凸面・凹面ともに磨滅のため調整痕は明瞭ではないが、凹面に微かに粘土板の切り離し痕跡が残る。側面は1/2にヘラで切り離し、凹面側を面取りしている。焼成は軟質であり、色調は浅黄色である。

丸瓦24は両側面・両端面とともに残っていない。凸面・凹面ともに磨滅のため調整痕は明瞭ではないが、凹面に微かに布目痕跡が残る。焼成は軟質であり、色調は灰白色である。

半瓦は11点（25～35・15）を図化した。

平瓦25は左側縁が残っている。粘土板一枚作りで、厚さ1.8cmを測り、側縁端部は薄くなっている。凸面は斜格子叩き目が残る。叩き目が重複しているため、単位は不明である。凹面は縱方向にナデ仕上げを行っている。焼成は硬質であり、色調は灰白色である。

平瓦26は両側面・両端面ともに残っていない。粘土板一枚作りで、厚さ1.7cmを測る。凸面は斜格子叩き目で、不揃いの平行四辺形である。凹面は磨滅している。焼成は軟質であり、色調はにぶい黄橙色である。

平瓦27は両側面・両端面ともに残っていない。粘土板一枚作りで、厚さ1.8cmを測る。凸面は大振りの斜格子叩き目である。凹面は磨滅が著しいが、布目痕跡が残る。焼成は軟質であり、色調は凸面が灰色、凹面が灰白色である。

平瓦28は広端面と左側縁が残っており、厚さ2.6cmを測る。凸面は大振りの斜格子叩き目である。凹面は布目痕跡（タテ8本/cm・ヨコ6本/cm）が残る。凹面の両端部はケズリ調整を行っている。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

平瓦29は広端面が残っており、粘土板一枚作りで、厚さ2.3cmを測る。凸面は大振りの斜格子叩き目である。凹面は布目痕跡（タテ6本/cm・ヨコ6本/cm）が残る。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

平瓦30は広端面が残っており、粘土板一枚作りで、厚さ2.9cmを測る。凸面は大振りの斜格子叩き目である。凹面から広端面にかけては布目痕跡（タテ8本/cm・ヨコ7本/cm）が残る。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

平瓦31は両側面・両端面ともに残っていない。厚さ2.1cmを測る。全体に磨滅しており、凸面は大振りの斜格子叩き目である。焼成は軟質であり、色調は橙色である。

平瓦32は広端面と右側縁が残っている。粘土板一枚作りで、厚さ1.8cmを測る。凸面は斜格子風叩き目で、明瞭ではない。凹面は磨滅が著しいが、布目痕跡が残る。焼成はやや軟質であり、色調は灰白色である。

平瓦33は左側縁が残り、厚さ1.7cmを測る。凸面は磨滅が著しいが、繩叩き目が確認できる。凹面は布目痕跡（タテ6本/cm・ヨコ6本/cm）が残る。側面は磨滅が著しい。焼成は軟質であり、色調は灰白色である。

平瓦34は広端面と左側縁が残っており、厚さ1.6cmを測る。全体に磨滅が著しく、凹面は僅かに布目痕跡が残る。焼成は軟質であり、色調は灰色である。

平瓦35は広端面が残っており、厚さ2.4cmを測る。凸面は磨滅のため不明である。凹面は布目痕跡（タテ9本/cm・ヨコ9本/cm）が残るが、端部は布の撻部のため歪みが大きい。焼成は軟質であり、色調は淡黄色である。

平瓦35は狭端面の一隅が残っている。粘土板一枚作りで、厚さ2.1cmを測る。凸面は繩叩き目でやや上上がりの斜め方向である。繩叩き目は荒く、深い繩目の単位が明瞭である。単位の幅は4.0cm程度である。凹面は布目痕跡（タテ11本/cm・ヨコ9本/cm）が存在している。狭端面側は端面をケズリ調整し、凹面側をケズリ調整し面取りをしている。右側面側は側面をケズリ調整し、凸面側・凹面側とともにケズリ調整し面取りをしている。焼成は軟質であり、色調は灰白色である。

第4章 自然科学的調査の成果

第1節 奥村廃寺出土柱の樹種

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、奥村廃寺より出土した柱材2点である。時期は7世紀から奈良時代と考えられる。

3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

第1表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 第1図

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晚材への移行はやや急で、晚材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質によりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

5. 所見

同定の結果、奥村廃寺の木材はスギ2点であった。スギは温帯に広く分布し、特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する針葉樹である。加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。遺跡周辺に生育していたか、地域的な流通の範囲で得られる樹種である。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 20-48.

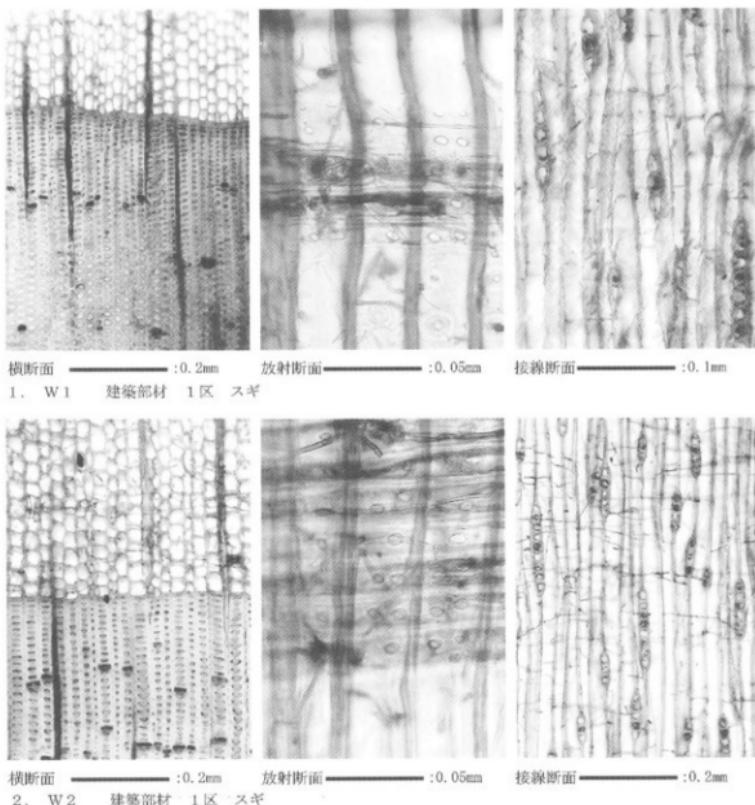
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 49-100.

島地謙・伊東隆大（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物山上遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p. 242

第1表 奥村廃寺における樹種同定結果

No.	調査番号	報告No.	種別	調査区	結果(学名/和名)	
1	2000280	W1	建築部材	1区	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
2	2000280	W2	建築部材	1区	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ



第1図 奥村廃寺の木材

第5章 まとめ

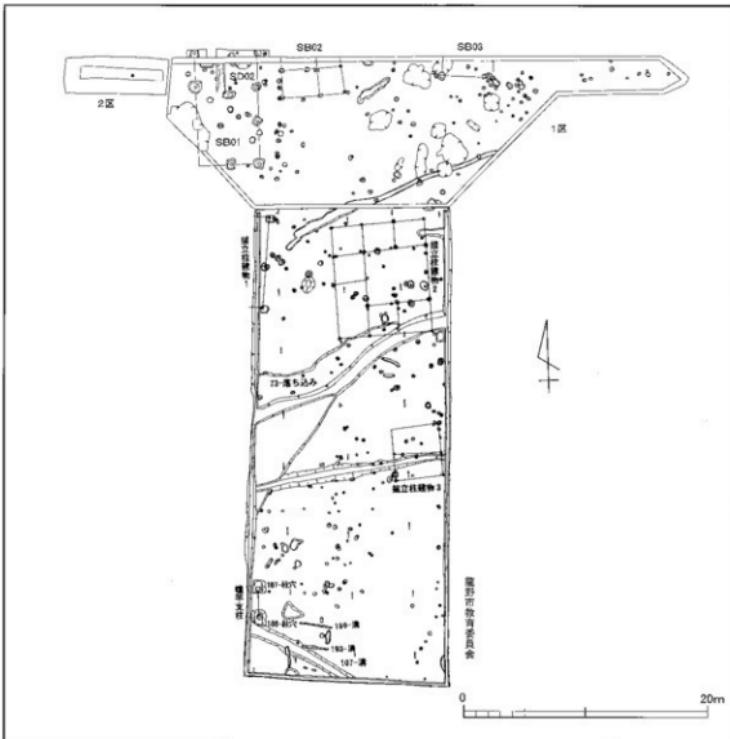
第1節 要約

今回、一般県道姫路新宮線緊急地方道路整備事業に伴う調査により、奥村廃寺南東部の一画の調査を実施した。ここでは検出した遺構と遺物について検討する。調査により検出した古代の遺構は僅かに方位が異なる掘立柱建物・柱穴と溝である。

龍野市教育委員会が圃場整備で調査を行ったE5区とK5区で検出した寺城東の南北溝の続きが2区の1区寄りの部分で出現する予定であった。しかし、コンクリートの擁壁と耕作による削平のため検出できなかった。掘立柱建物については龍野市道沢田1号線に伴う調査分と併せて次節で検討する。

出土した遺物は少ないが、土器と瓦が存在し、土器は僅かで瓦が中心である。奥村廃寺の軒瓦は今里幾次による詳細な分類がある。

軒丸瓦は竹管文縁複弁八葉蓮華文であり、今里分類では軒丸瓦B類である。今里分類軒丸瓦B類は龍野市教育委員会が調査した奥村廃寺の軒丸瓦の中でもっとも多く出土している。その軒丸瓦B類の中で軒



第2図 奥村廃寺南東部の遺構配置

丸瓦B 2類は最も多く出土している。時間的には奥村庵寺の軒丸瓦B類は奥村庵寺のⅠ期に位置付けられており、7世紀末の年代を当てている。軒平瓦は出土していない。

平瓦は小破片のみで、全体の様相が判明するものは存在しないが、粘土板桶巻作りと粘土板一枚作りのものが存在する。粘土板桶巻作りのものは格子叩き口のもののみであり、粘土板一枚作りのものは格子叩き口のものと繩叩き口のものがある。粘土板桶巻作りのものには4・5・6・7・10があり、小型の斜格子叩き口である。粘土板一枚作りのものは格子叩き口のもの29・30・32があり、大型の斜格子叩き口もしくは明瞭ではない格子叩き口である。粘土板一枚作りのものは繩叩き口のもの8・15・33がある。

龍野市教育委員会が調査した奥村庵寺本体の様相が公表されていないため、一部の様相でしかない。

第2節 遺跡の範囲と時期

奥村庵寺の南東地区に位置する今回報告の調査区と南側に隣接する龍野市教育委員会の北半分の調査区と合成した遺構配置図が第2図である。これによると、奥村庵寺の方位あるいは周辺条里と整合するように建物方向は正方位をとっている。正方位ではあるが微妙に方位が振れており、方位と柱穴の形態・規模からA・B・Cの3類型に分類できる。

A類は北から1° 東に振っている掘立柱建物SB01(県)と檼竿支柱(市)がある。柱掘形は方形であり、一辻70cm前後と大規模である。この方位と同じ遺構は金堂・推定講堂と北の東西溝と南の東西溝である。

B類は北から5° 東に振っている掘立柱建物SB03(県)と掘立柱建物1(市)がある。柱掘形は円形であり、直径60cm程度と中規模である。これらは北から9° 東に振っている東の東西溝に近い。

C類は北から1° 東に振っている掘立柱建物SB02(県)・掘立柱建物2(市)と掘立柱建物3(市)がある。柱掘形は円形であり、直径30cm程度と小規模である。

いずれの遺構も時期がわかる遺物が出土していないが、A類とB類は奈良時代、C類は平安時代後期であろう。A類は奥村庵寺金堂と方位を同じくするため、一番古く、B類・C類へと続くと想定できる。

以上、奥村庵寺寺域外南東部の様相の一端が明らかになった。

参考文献

- ・井内古文化研究室『竜野市・中井瓦窯跡発掘調査報告』井内古文化研究室報3 1969年
- ・揖保川町教育委員会『美久山墳墓群』揖保川町文化財報2 1985年
- ・揖保川町教育委員会『美久山墳墓群III』揖保川町文化財報告6 1991年
- ・揖保川町教育委員会『山津屋・黍田・原』揖保川町文化財報告8 2000年
- ・新宮町教育委員会『古島占墳』新宮町文化財調査報告4 1983年
- ・新宮町教育委員会『城山城』新宮町文化財調査報告10 1988年
- ・新宮町教育委員会『姥塚古墳』新宮町文化財調査報告27 2002年
- ・太子町教育委員会『川島・立岡遺跡』 1971年
- ・太子町教育委員会『播磨山船塗現況調査報告III』 1990年
- ・太子町教育委員会『南柳遺跡の調査』太子町文化財資料第45集 1994年
- ・太子町教育委員会『常全蓮寺遺跡の調査』太子町文化財資料第51集 1995年
- ・太子町教育委員会『南柳遺跡』 1997年
- ・太子町教育委員会『船塗遺跡の調査』太子町文化財資料第52集 1998年
- ・太子町教育委員会『立岡笠山遺跡の調査』太子町文化財資料第57集 1999年

- ・太子町史編集専門委員会『太子町史』第1巻 1996年
- ・太子町史編集専門委員会『太子町史』第3巻 1989年
- ・大住寺群集墳調査団『龍野市大住寺群集墳』1996年
- ・龍野市教育委員会『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書』 1971年
- ・龍野市教育委員会『尾崎遺跡』龍野市文化財調査報告Ⅰ 1977年
- ・龍野市教育委員会『福田天神遺跡』龍野市文化財調査報告Ⅳ 1982年
- ・龍野市教育委員会『片吹遺跡』龍野市文化財調査報告書VI 1985年
- ・龍野市教育委員会『小神庵寺発掘調査報告』龍野市文化財調査報告7 1992年
- ・龍野市教育委員会『布勢駅家』龍野市文化財調査報告8 1992年
- ・龍野市教育委員会『播磨因幡在現況調査報告V』龍野市文化財調査報告9 1993年
- ・龍野市教育委員会『小神芦原遺跡』龍野市文化財調査報告10 1993年
- ・龍野市教育委員会『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告11 1994年
- ・龍野市教育委員会『龍野市寄井遺跡』龍野市文化財調査報告13 1994年
- ・龍野市教育委員会『尾崎遺跡Ⅱ』龍野市文化財調査報告14 1995年
- ・龍野市教育委員会『養久山・前地遺跡』龍野市文化財調査報告15 1995年
- ・龍野市教育委員会『新宮東山古墳群』龍野市文化財調査報告16 1996年
- ・龍野市教育委員会『奥村庵寺』龍野市文化財調査報告18 1997年
- ・龍野市教育委員会『小神社の堂遺跡』龍野市文化財調査報告20 1998年
- ・龍野市教育委員会『北山遺跡』龍野市文化財調査報告23 2001年
- ・龍野市教育委員会『奥村庵寺Ⅱ』龍野市文化財調査報告24 2002年
- ・龍野市教育委員会『清水遺跡』龍野市文化財調査報告25 2004年
- ・龍野市教育委員会『小神南遺跡』龍野市文化財調査報告26 2005年
- ・龍野市史編纂専門委員会『龍野市史』第1巻 1978年
- ・龍野市史編纂専門委員会『龍野市史』第4巻 1984年
- ・たつの市教育委員会『竹方遺跡』たつの市文化財調査報告1 2008年
- ・奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』(三十四) 1998年
- ・兵庫県教育委員会『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告』兵庫県文化財調査報告第4冊 1971年
- ・兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡』兵庫県文化財調査報告第30冊 1985年
- ・兵庫県教育委員会『中井古墳群・中井鴨池窯跡』兵庫県文化財調査報告38冊 1987年
- ・兵庫県教育委員会『小大丸遺跡』兵庫県文化財調査報告47冊 1987年
- ・兵庫県教育委員会『龍子向イ山』兵庫県文化財調査報告51冊 1987年
- ・兵庫県教育委員会『宝林寺北遺跡』兵庫県文化財調査報告49冊 1987年
- ・兵庫県教育委員会『養久・乙城山』兵庫県文化財調査報告58冊 1988年
- ・兵庫県教育委員会『半山山』兵庫県文化財調査報告65冊 1989年
- ・兵庫県教育委員会『小大丸遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告66冊 1989年
- ・兵庫県教育委員会『龍野城』兵庫県文化財調査報告77冊 1990年
- ・兵庫県教育委員会『福田片岡遺跡』兵庫県文化財調査報告94冊 1991年
- ・兵庫県教育委員会『宮脇遺跡』兵庫県文化財調査報告138冊 1995年
- ・兵庫県教育委員会『片島古墳群・片島遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告143冊 1995年
- ・兵庫県教育委員会『清水遺跡』兵庫県文化財調査報告183冊 1999年
- ・兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』第1・2分冊 2004年
- ・兵庫県教育委員会『竹原中山遺跡』兵庫県文化財調査報告295冊 2006年
- ・兵庫県教育委員会『小大丸中谷庵寺・中谷遺跡・中谷古墳』兵庫県文化財調査報告306冊 2006年
- ・御津町教育委員会『從岩南山遺跡Ⅰ』御津町埋蔵文化財報告書1 1995年
- ・「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典23兵庫県』角川書店 1988年
- ・今井林太郎監修『日本歴史地名大系29II 兵庫県の地名II』平凡社 1999年

第2表 奥村庵寺瓦類一覧

報告No.	図版	写真区画	種別	器種	調査番号	調査区	遺構1	遺構2	器高(cm)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	内径(cm)	実測No.
1	11	13	瓦	軒丸瓦	990283	確認4			中房径5.0	瓦当径15.6	縁幅1.4	縁厚0.7	-	9
2	11		瓦	丸瓦	990283	確認4			6.1	10.4+	最大幅9.5+	2.2	-	10
3	11	13	瓦	平瓦	990283	確認4			6.1+	15.7+	15.2+	2.1	-	1
4	11	13	瓦	平瓦	990283	確認4			5.4+	12.2+	12.7+	2.3	-	3
5	12	14	瓦	平瓦	990283	確認4			3.6+	15.7+	8.9+	1.9	-	8
6	12	14	瓦	平瓦	990283	確認4			4.3+	11.6+	10.5+	2.2	-	5
7	12	14	瓦	平瓦	990283	確認4			4.3+	13.4+	9.0+	2.4	-	6
8	12	15	瓦	平瓦	990283	確認4			4.7+	11.8+	10.1+	2.2	-	2
9	13	15	瓦	平瓦	990283	確認4			4.7+	14.3+	13.3+	2.8	-	4
10	13	15	瓦	隅平瓦	990283	確認4			5.4+	13.8+	12.0+	2.2	-	7
12	14	16	瓦	平瓦	2000280	1	SD02		4.8+	9.1+	10.8+	1.8	-	34
14	14	16	瓦	平瓦	2000280	1	SB01	P13	2.2+	5.4+	6.6+	2.0	-	26
15	14	16	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		3.3+	6.5+	最大幅8.4+	2.1	-	25
20	15	17	瓦	丸瓦	2000280	1	擾乱坑		6.1+	7.2+	5.8+	1.5	10.7	15
21	15	17	瓦	丸瓦	2000280	1	擾乱坑		8.0+	12.0+	13.0+	2.1	14.0	29
22	15		瓦	丸瓦	2000280	1	擾乱坑		6.2+	9.3+	5.6+	1.9	14.5	17
23	15		瓦	丸瓦	2000280	1	擾乱坑		7.0+	15.0+	5.2+	1.7	12.5	18
24	15		瓦	丸瓦	2000280	1	擾乱坑		2.7+	7.6+	8.7+	2.0	(8.5)	33
25	15	17	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		6.1+	6.1+	8.0+	1.8	-	16
26	16	17	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		2.1+	9.2+	10.1+	1.7	-	28
27	16	17	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		2.1+	10.6+	7.5+	1.8	-	31
28	16	18	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		3.6+	10.8+	8.4+	2.6	-	11
29	16	18	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		-	7.6+	5.8+	2.3	-	13
30	16	18	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		-	10.1+	8.5+	2.9	-	12
31	16	18	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		2.5+	8.2+	6.9+	2.1	-	14
32	16	18	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		3.1+	10.0+	9.2+	1.8	-	32
33	16	18	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		2.5+	5.7+	6.4+	1.7	-	30
34	16		瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		1.9+	6.2+	3.9+	1.6	-	20
35	16	17	瓦	平瓦	2000280	1	擾乱坑		2.7+	8.0+	7.5+	2.4	-	19

第3表 奥村庵寺土器類一覧

報告No.	図版	写真区画	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構1	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	実測No.
11	14	16	須恵器	坪B蓋	口縁部	2000280	5	SD02		(14.8)	1.8+	-	35
13	14	16	須恵器	坪	口縁部	2000280	3	SB03	P07	(14.9)	2.7+	-	24
16	15	16	須恵器	坪	口縁部	2000280	1			(12.0)	2.4+	-	22
17	15	16	土師器	碗	底部	2000280	1			-	2.0+	(6.6)	23
18	15	16	須恵器	壺	底部	2000280	1			-	5.9+	(10.0)	27
19	15	16	須恵器	鉢	底部	2000280	1	擾乱坑		-	5.4+	11.0	21

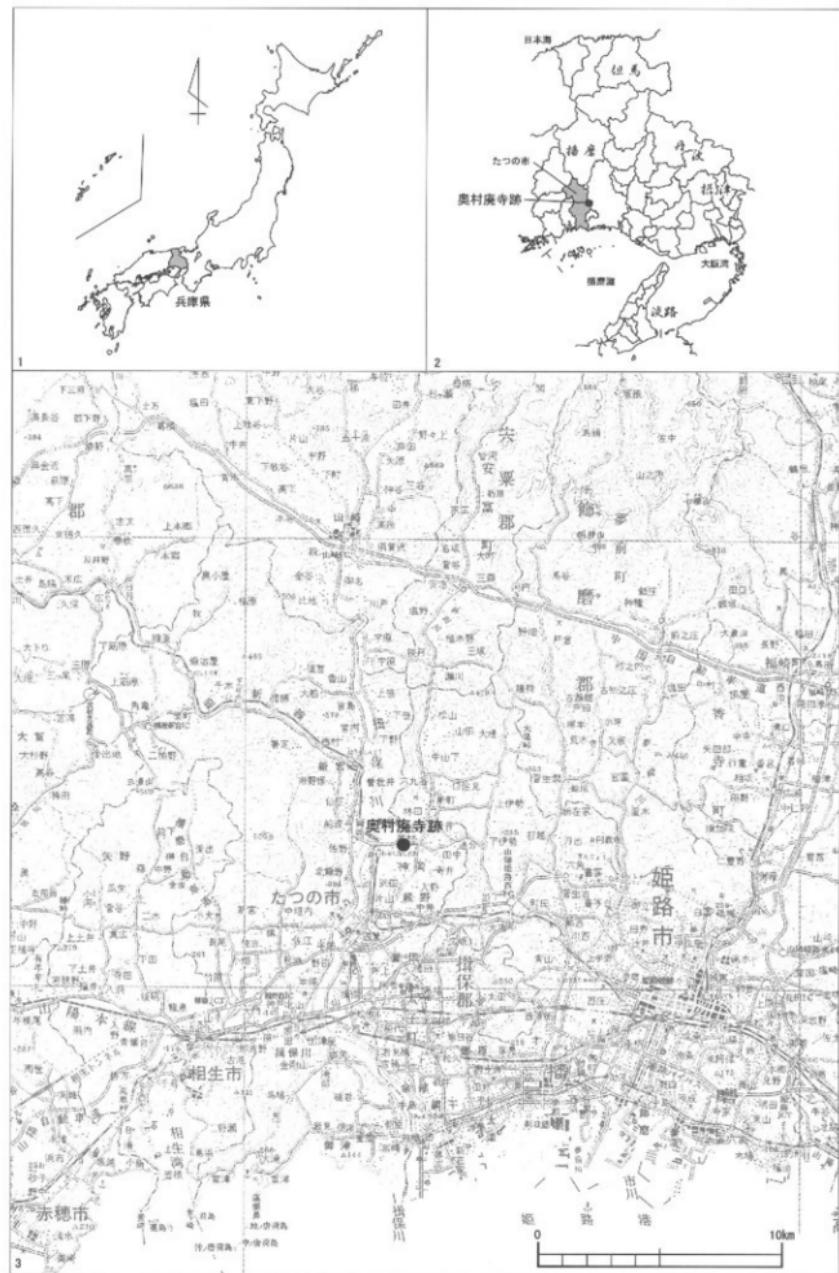
第4表 奥村庵寺木器類一覧

報告No.	図版	写真区画	種別	器種	調査番号	調査区	遺構1	遺構2	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	実測No.
W 1	14	19	建築部材	柱	2000280	1	SB03	P04	47.0	22.9	17.5	W 1
W 2	14	19	建築部材	柱	2000280	1	SB03	P05	64.0	17.0	17.8	W 2

図

版

図版1 遺跡

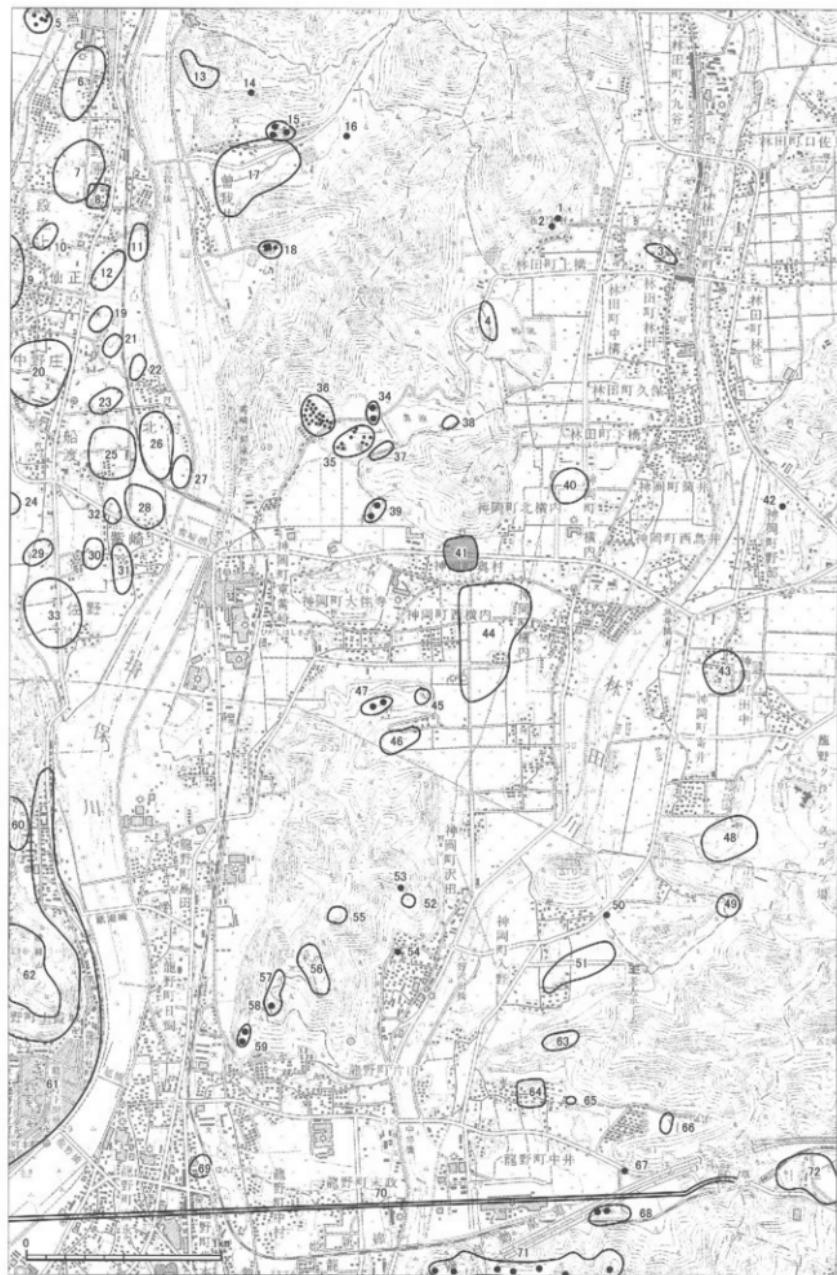


1. 兵庫県の位置 2. たつの市の位置 3. 奥村庵寺跡の位置(1/200,000)

図版3	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	020009	孤塚1号墳	姫路市林田町上構	古墳	古墳
2	020010	孤塚2号墳	姫路市林田町上構	古墳	古墳
3	020011	林田庵屋原・瀬尾山城跡	姫路市林田町林田	中世・近世	城館
4	020013	鳴滝遺跡	姫路市林田町上構	弥生	散布地
5	430255～430261	新田山古墳群	たつの市新宮町新宮原・新田山下	古墳	古墳
6	430080	井野原畠原上散布地	たつの市新宮町井野原字畠原上・当元	古墳	散布地
7	430081	井野原砂原散布地	たつの市新宮町井野原字砂原・高田	弥生・古墳	散布地
8	430141	井野原城	たつの市新宮町井野原字本丸	中世	城館
9	430082	段之上・仙正欲布地	たつの市新宮町段之上字福道洞・仙正宇為付	古墳	散布地
10	430083	井野原堅昌敷石地	たつの市新宮町井野原字堅昌	古墳	散布地
11	430084	井野原向川原散布地	たつの市新宮町井野原字向川原・竹ノ端	古墳	散布地
12	430085	井野原越前散布地	たつの市新宮町井野原字越前	古墳	散布地
13	430001	曾我井城跡	たつの市新宮町曾我井字城山	中世	城館
14	430002	曾我井宮山1号塚	たつの市新宮町曾我井字宮山	弥生	墳墓
15	430003～430005	曾我井北山古墳群	たつの市新宮町曾我井字北山	古墳	古墳
16	430006	曾我井尾尾1号墳	たつの市新宮町曾我井字尾尾	古墳	古墳
17	430007	曾我井遺跡	たつの市新宮町曾我井字前田	縄文～中世	集落
18	430008～430012	曾我井赤堀古墳群	たつの市新宮町曾我井字赤堀	古墳	古墳
19	430086	北村露日月田散布地	たつの市新宮町北村字露日月	古墳	散布地
20	430087	中野庄下横敷散布地	たつの市新宮町中野庄字下横敷	古墳	散布地
21	430088	北村下原散布地	たつの市新宮町北村字下原	古墳	散布地
22	430089	北村楓下散布地	たつの市新宮町北村字楓下	古墳	散布地
23	430091	北村梅原散布地	たつの市新宮町北村字梅原・車田	古墳～中世	散布地
24	430066	下野田中弘敷散布地	たつの市新宮町下野田字中弘	古墳	散布地
25	430067	船渡島帽子町散布地	たつの市新宮町船渡島字帽子町	古墳	散布地
26	430068	北村前田散布地	たつの市新宮町北村字前田	弥生	散布地
27	430376	觜崎・天満造跡	たつの市新宮町觜崎字天満	古墳・奈良	寺院
28	430069	觜崎土井後敷散布地	たつの市新宮町觜崎土井後	古墳	散布地
29	430070	船渡西河原散布地	たつの市新宮町船渡西河原	古墳	散布地
30	430071	觜崎大上金散布地	たつの市新宮町觜崎大上金	古墳	散布地
31	430072	觜崎ふけ散布地	たつの市新宮町觜崎ふけ・一丁歩	古墳	散布地
32	430073	佐野町下原散布地	たつの市新宮町佐野町下原・北中島	弥生・古墳	散布地
33	430074	保留城	たつの市新宮町觜崎字上升後	中世	城館
34	120001・120002	大住寺吉原群	たつの市神岡町大住寺大鳥	古墳	古墳
35	120003～120012	大住寺吉原群	たつの市神岡町大住寺大鳴	古墳	古墳
36	120013～120056	大住寺吉原群	たつの市神岡町大住寺大鳴寺	古墳	古墳
37	120057	皿池遺跡	たつの市神岡町大住寺大鳴皿池	旧石器・網文	散布地
38	120058	奥池遺跡	たつの市神岡町大住寺大鳴奥池	旧石器・網文	散布地
39	120059～120060	愛宕山古墳群	たつの市神岡町愛宕山清水田	古墳	古墳
40	120061	上郷内遺跡	たつの市神岡町上郷内横中構・鶴井丁ほか	縄文～平安	集落
41	120062	奥村庵寺跡	たつの市神岡町奥村正楽寺・北横内瓜木原ほか	奈良・平安	寺院
42	120064	野谷古墳	たつの市神岡町野谷韶平山	古墳	古墳・散布地
43	120066	田中遺跡	たつの市神岡町田中荒神畠ほか	古墳・近世	散布地
44	120067	横内遺跡	たつの市神岡町西匂内・横内・沢田ほか	縄文～平安	集落
45	120068	樺神社裏山遺跡	たつの市神岡町沢田山鼻ほか	弥生～中世	散布地
46	120069	沢田宮谷遺跡	たつの市神岡町沢田宮谷ノ前ほか	弥生～中世	散布地
47	120070～120071	柳原山裏山古墳群	たつの市神岡町柳原山	古墳	古墳
48	120074	寄井遺跡	たつの市神岡町寄井南山ほか	弥生・中世	集落
49	120075	桜谷遺跡	たつの市神岡町寄井桜谷	縄文	散布地
50	120076	天光寺山古墳	たつの市神岡町寄井天光寺	古墳	古墳
51	120077	入野遺跡	たつの市神岡町入野丁山ほか	古墳・奈良	散布地
52	120078	沢田遺跡	たつの市神岡町沢田牛垂保谷	弥生	散布地
53	120079	沢田1号墳	たつの市神岡町沢田牛垂保谷	古墳	古墳
54	120080	沢田2号墳	たつの市神岡町沢田大野前	古墳	古墳
55	120081	片山東北遺跡	たつの市神岡町沢田、龍野町島田	平安・中世	散布地
56	120082	片山東山遺跡	たつの市龍野町片山東山	弥生	散布地
57	120083	片山東山南遺跡	たつの市龍野町片山東山・島田	弥生・古墳・平安・中世	散布地
58	120084	片山東山1号墳	たつの市龍野町片山西山・島田	古墳	古墳
59	120085～120086	片山東古墳群	たつの市龍野町片山西山・島田	古墳	古墳
60	120088	北龍町遺跡	たつの市龍野町北龍町の場	弥生	散布地
61	120089	龍野城下町遺跡	たつの市龍野町大手ほか・帯	近世	集落・城館
62	120090	前期瀬戸城跡	たつの市龍野町上瀬戸、鷹羅山頂	中世	城館
63	120098	中井遺跡	たつの市龍野町中井堀内山	弥生	散布地
64	120099	中井廐寺跡	たつの市龍野町中井堀内	奈良・平安	寺院
65	120100	中井瓦窯跡	たつの市龍野町中井東堀内	奈良・平安	瓦窯
66	120101	中井花池遺跡	たつの市龍野町中井奥垣内	奈良・平安	散布地
67	120102	中井鶴池遺跡	たつの市龍野町中井鶴坂	古墳	須恵器類
68	120103・120104	中井古墳群	たつの市龍野町中井向山	古墳	古墳
69	120105	中村遺跡	たつの市龍野町中井本、中村大堀ほか	弥生・古墳	散布地・古墳
70	120106	古代山陽道跡	たつの市龍野町中井から揖西町小穴丸へ横断	奈良・平安	道路
71	120117～120124	内山古墳群	たつの市青葉町内山向山	古墳	古墳
72	020082	蘆の池遺跡	尼崎市志脇	縄文	散布地

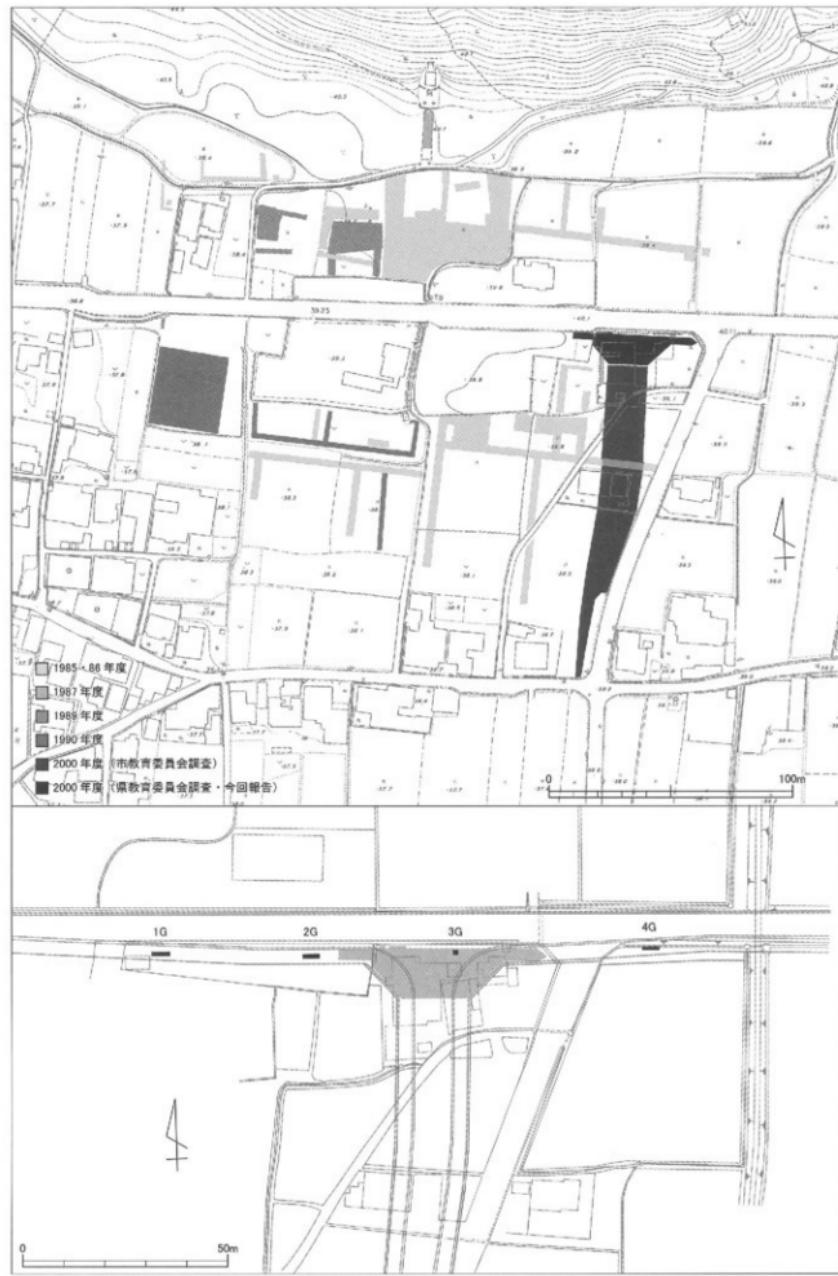
奥村庵寺跡周辺の主要遺跡一覧

図版3 遺跡



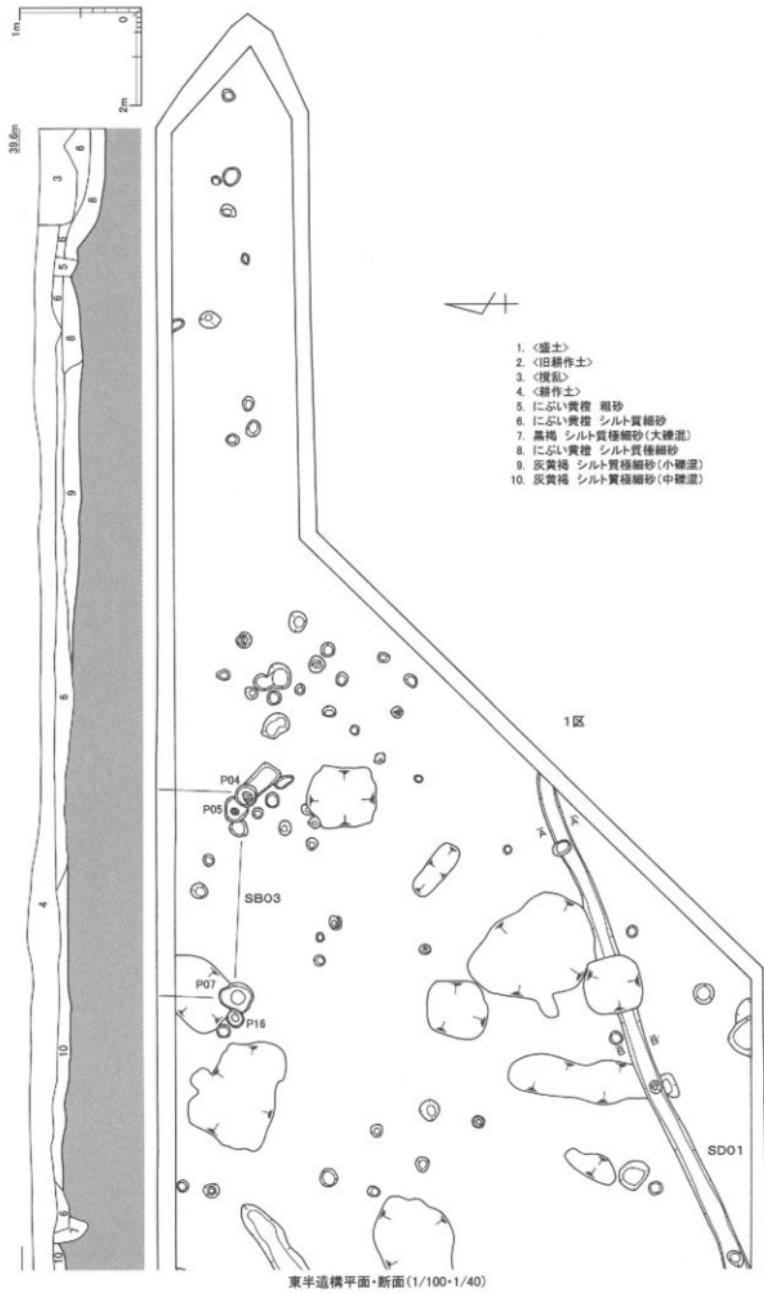
奥村庵寺跡周辺の主要遺跡(1/25,000)

図版4
遺跡



上:奥村康寺跡の本発掘調査区と既往の調査区の位置(1/2,000) 下:確認調査と本発掘調査の位置(1/1,200)

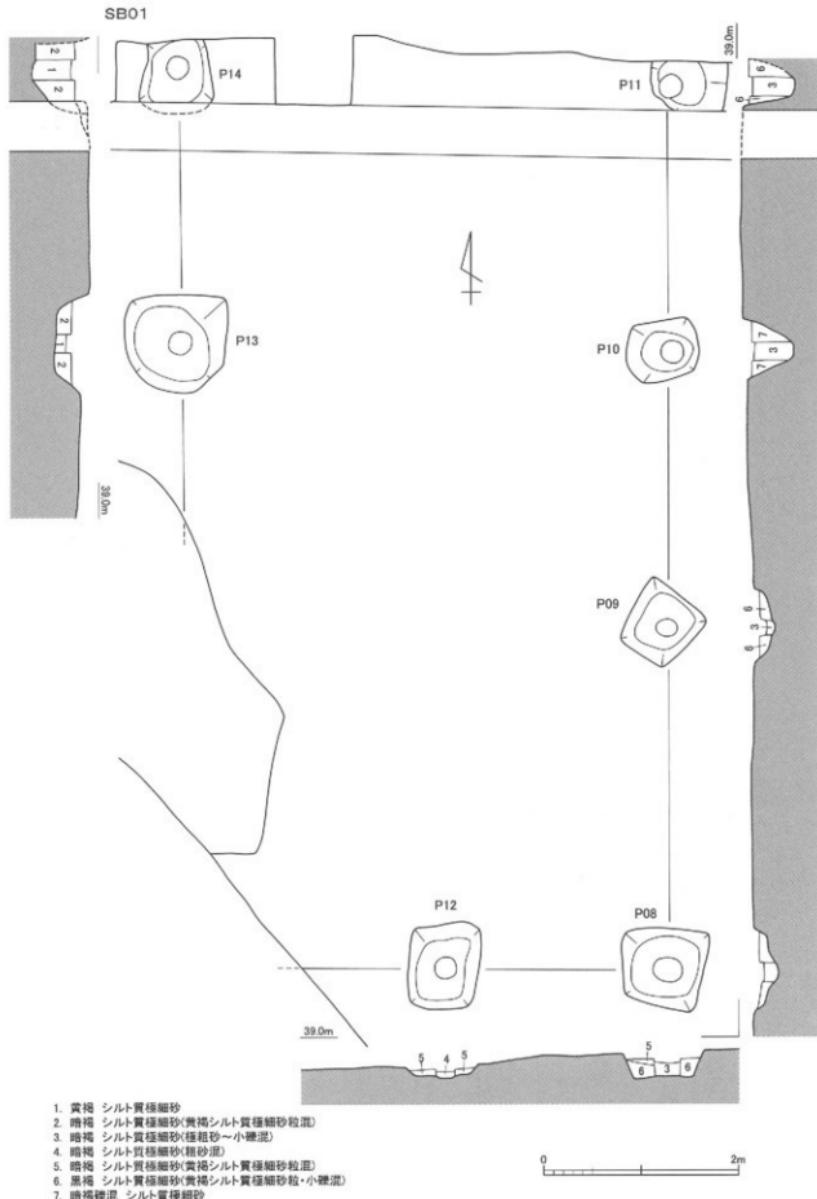




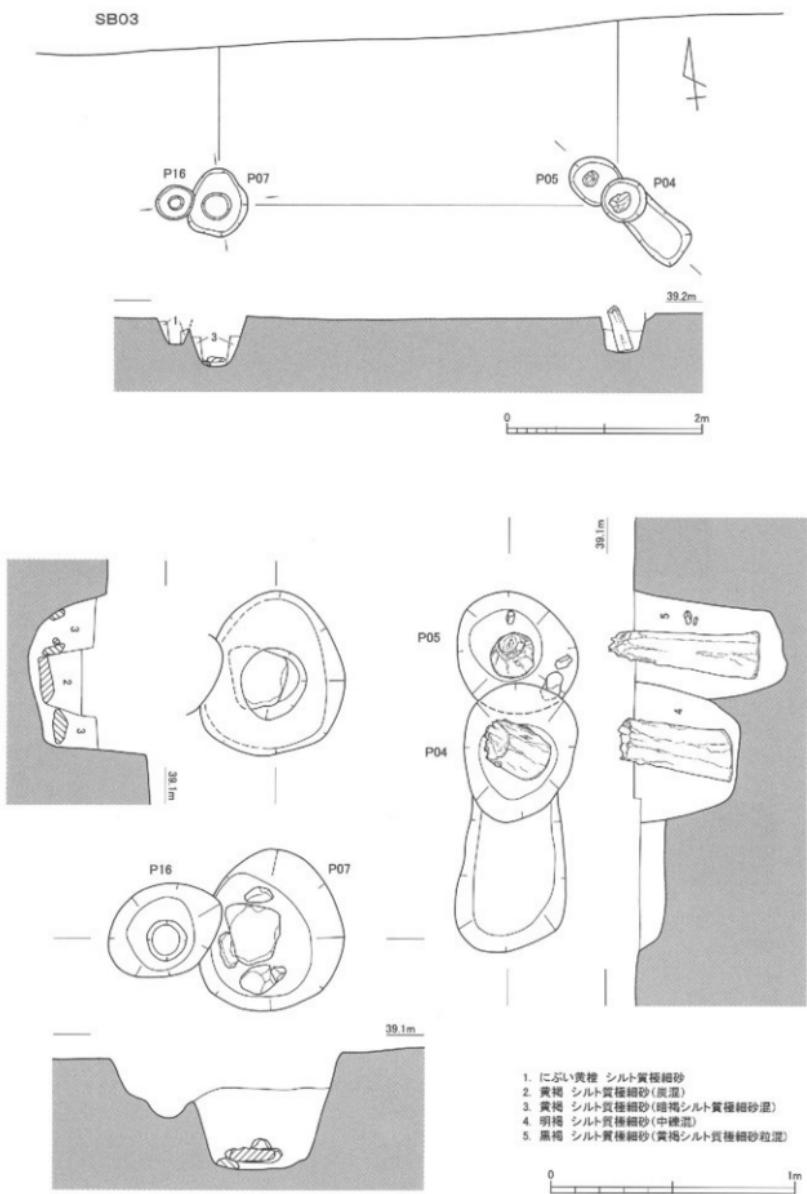
図版7 遺構



図版 8
遺構

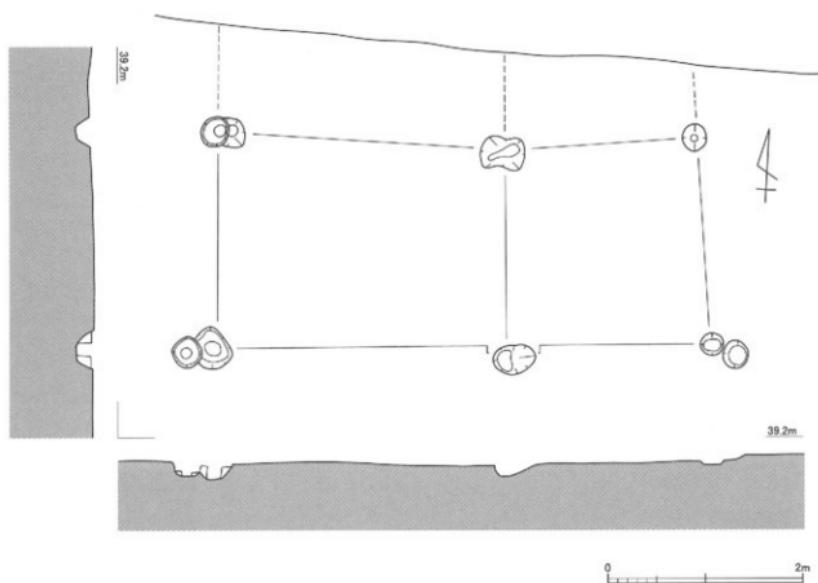


掘立柱建物 SB01 (1/50)



掘立柱建物 SB03(1/50) 柱穴 P07-P05-P04平面・断面(1/20)

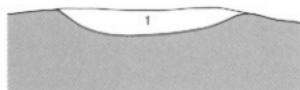
SB02



SD01

A

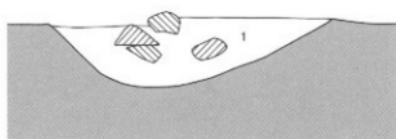
39.0m



SD02

C

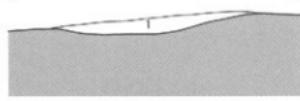
39.0m



SD01

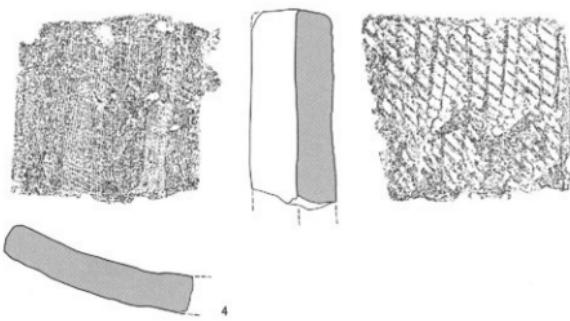
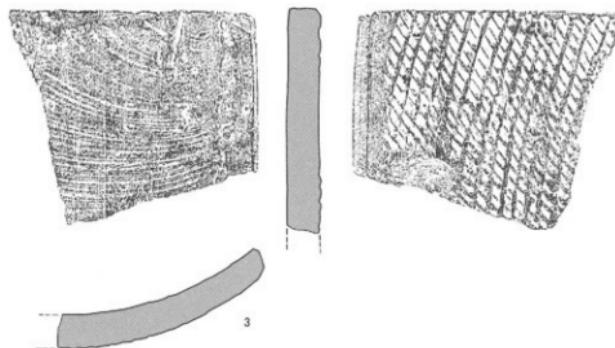
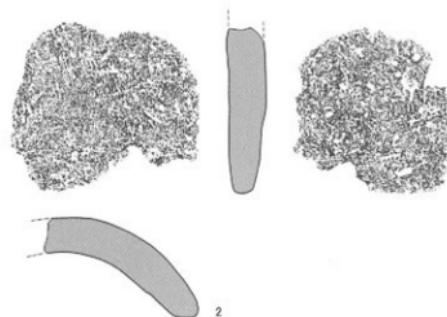
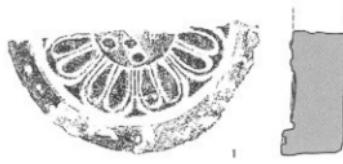
B

39.0m



0 50cm

図版
11
遺物

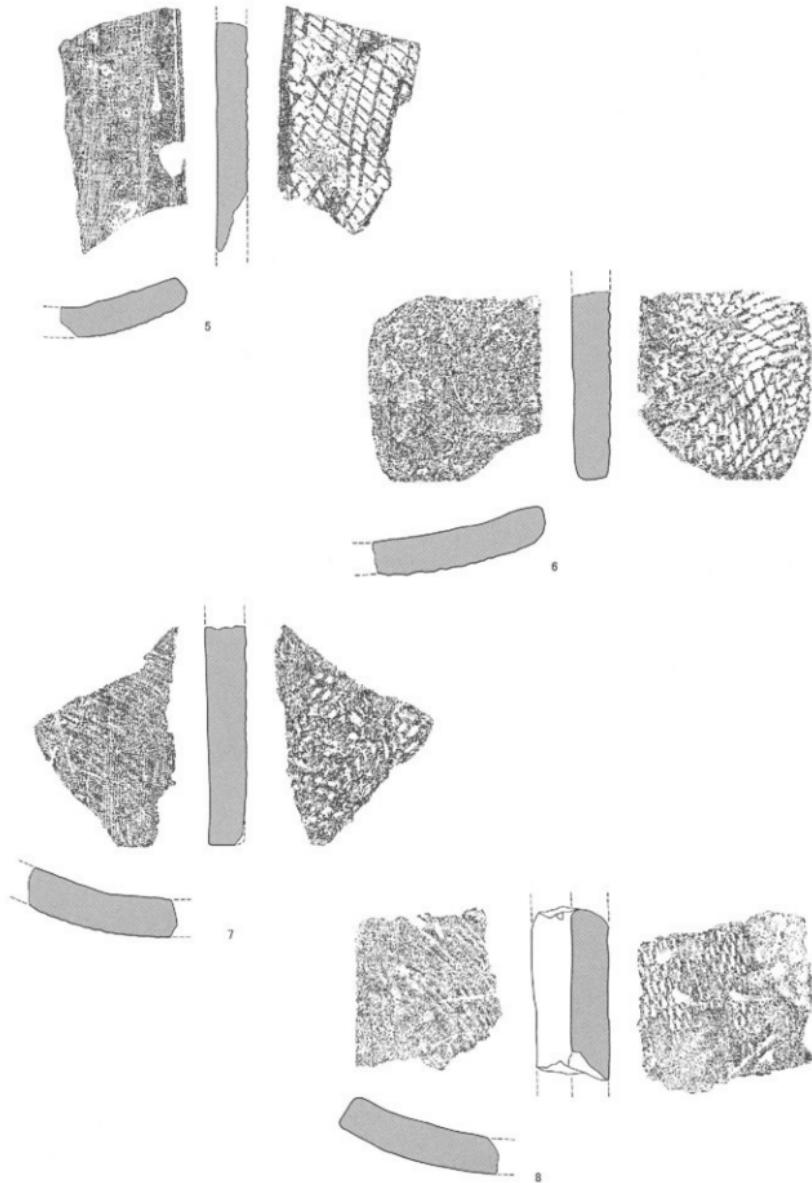


0 20cm

確認調査区出土瓦1(1~4)

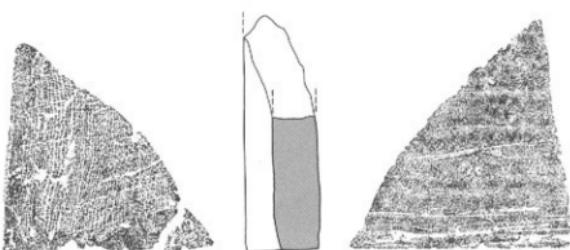
図版 12

遺物

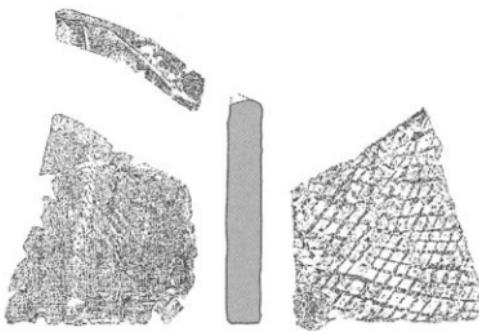


確認調査区出土瓦2(5~8)





9



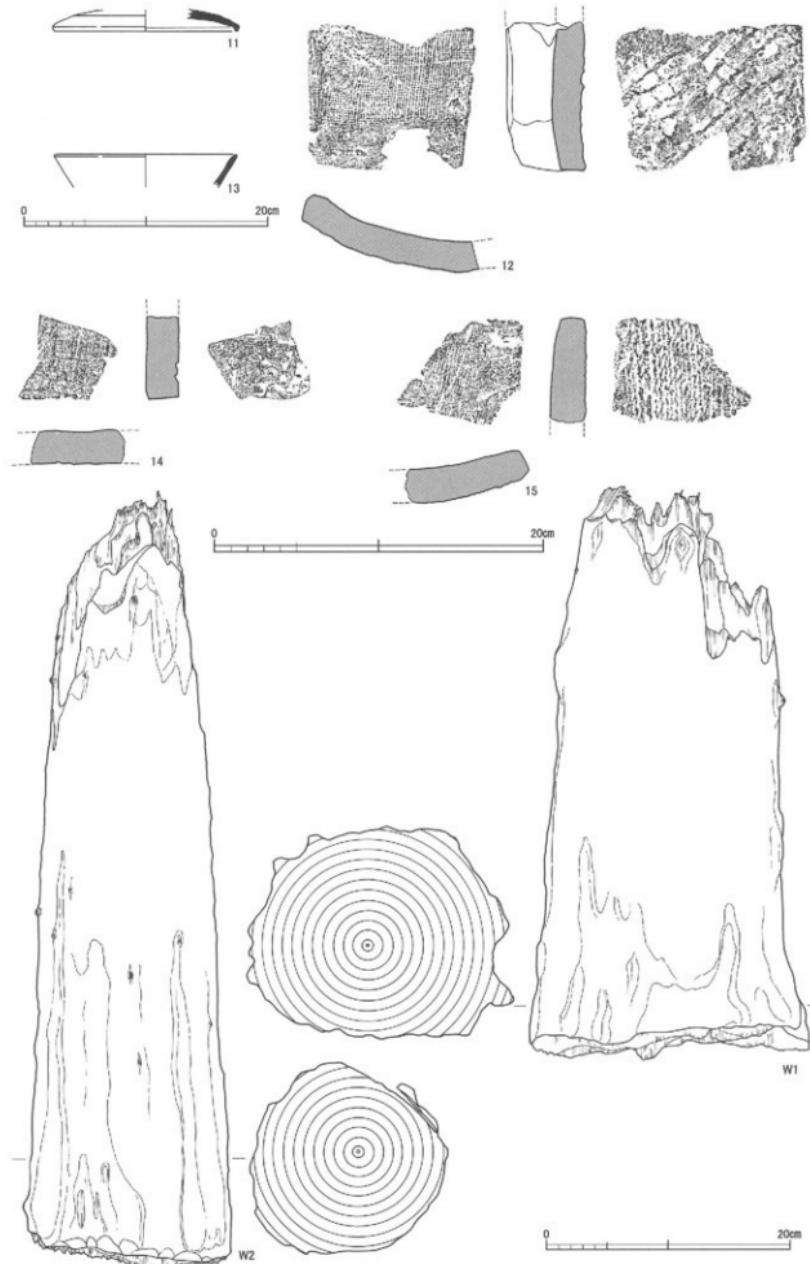
10



確認調査区出土瓦3(9~10)

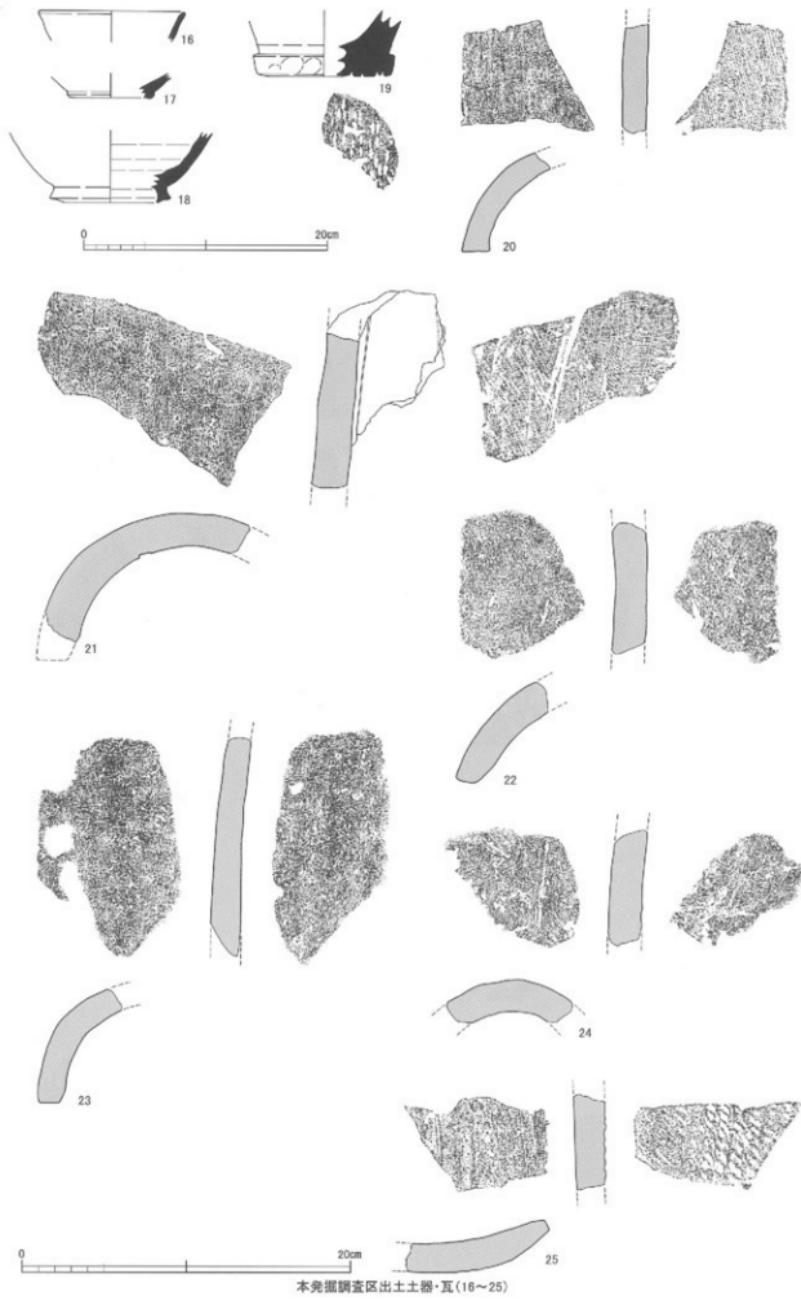
図版
14

遺物

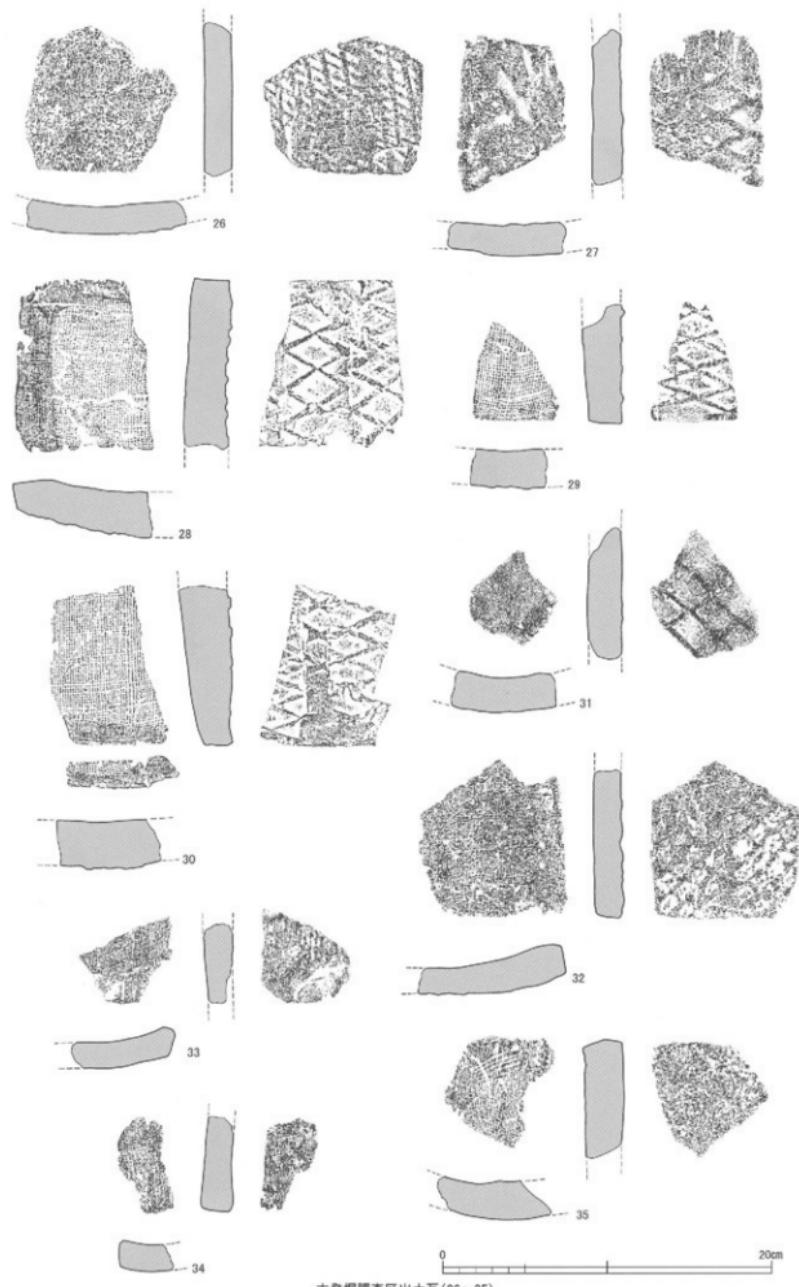


本発掘調査区出土土器・瓦・柱(11~15・W1・W2)

図版 15
遺物



図版
16
遺物



本発掘調査区出土瓦(26~35)

写

真

図

版

写真図版 1 遺跡



1 奥村庵寺跡 遠景(東から)



2 奥村庵寺跡 遠景(南から)

写真図版 2

遺跡



3 奥村庚寺跡 近景(西から)



4 奥村庚寺跡 近景(南から)



5 調査地 全景(西から)



6 摂立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根 断面(南西から)

写真図版4

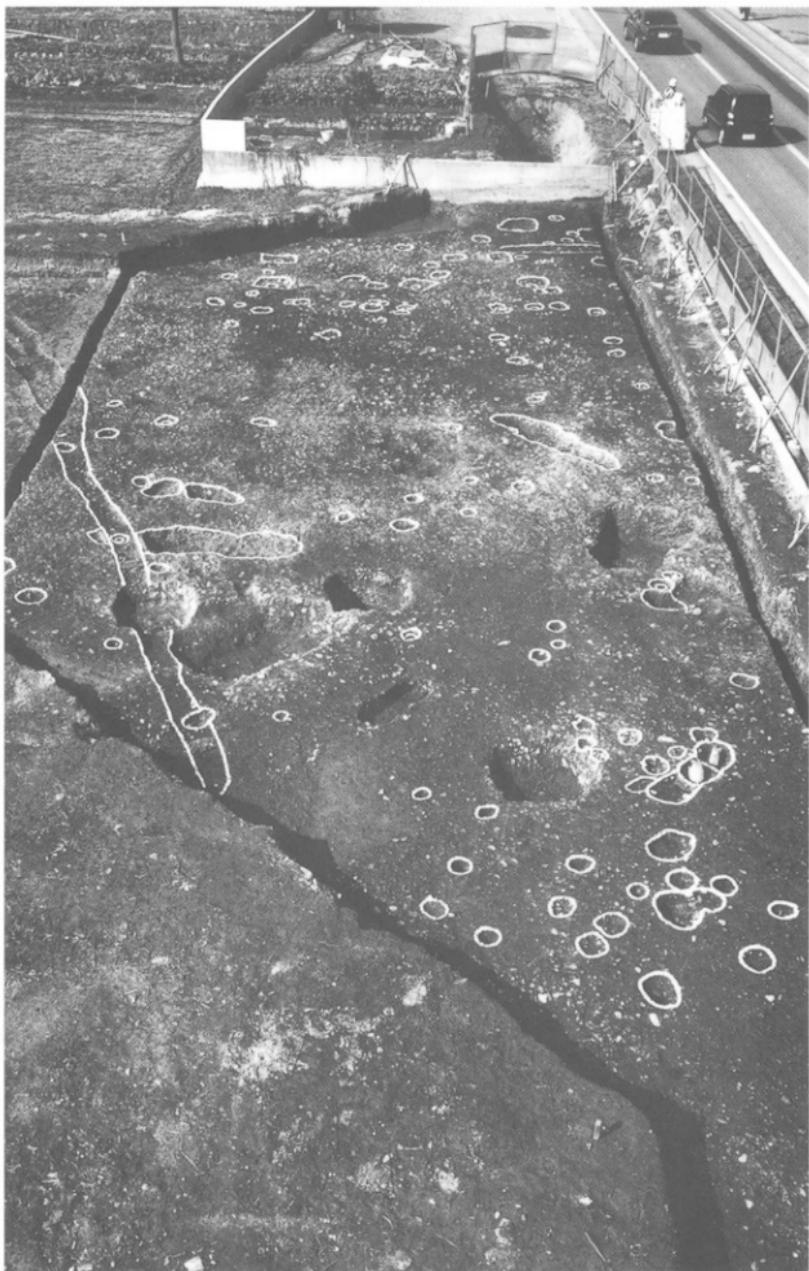
遺跡



7 奥村庚寺跡周辺 遠景(真上から)



8 奥村庚寺跡 遠景(西から)



9 調査地 全景(東から)

写真図版 6

遺構



10 調査地 遺構(東から)



11 調査地 全景(東から)



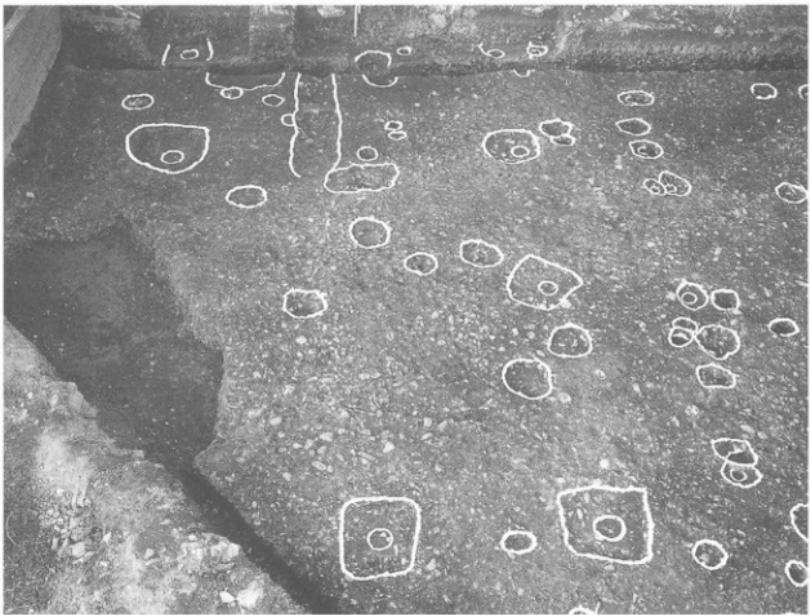
12 調査地 全景(西から)



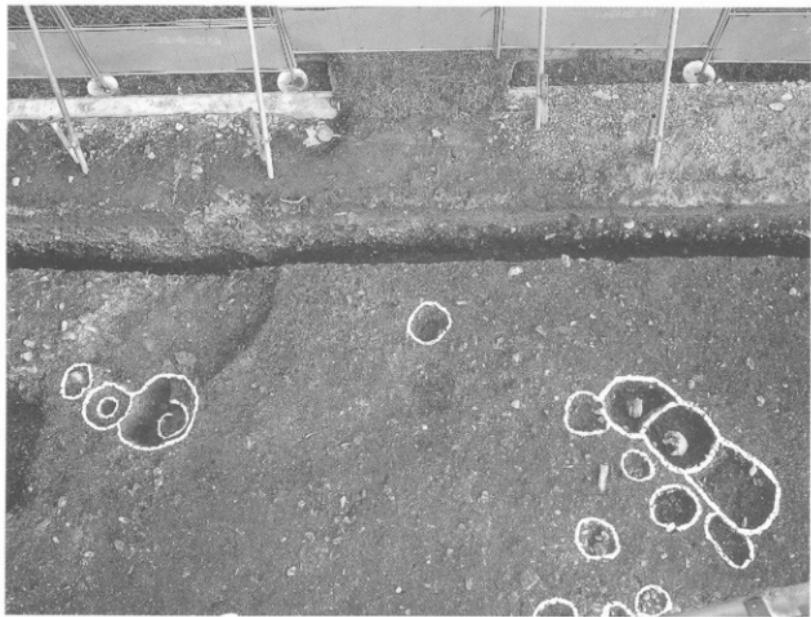
13 据立柱建物SB01(西から)



14 挖立柱建物SB01・SB02(東から)



15 挖立柱建物SB01(南から)



16 振立柱建物SB03(南から)



17 振立柱建物SB02(南西から)



18 柱穴P07 断面(南から)



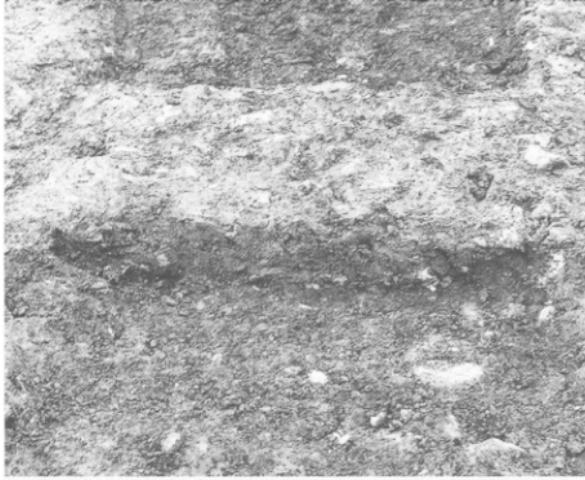
19 柱穴P07 積石(東から)



20 摂立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根 掘出状況(南西から)



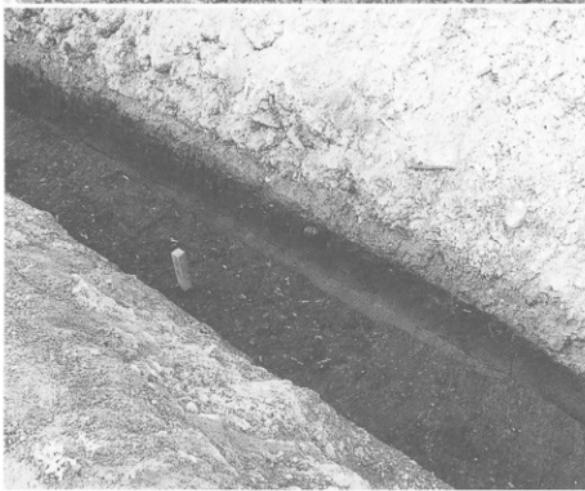
21 摂立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根 断面(南西から)



22 溝SD01 断面(西から)



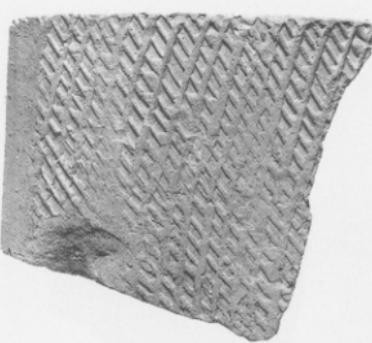
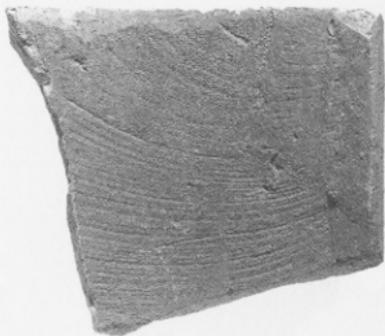
23 溝SD02 断面(南から)



24 2区 全景(南東から)



1



3



4



5



6



7



8



9



10

確認調査区出土 瓦 3



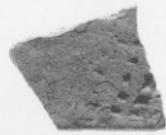
12



11



14



13



15



16



17



18

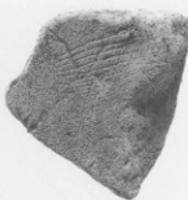
19



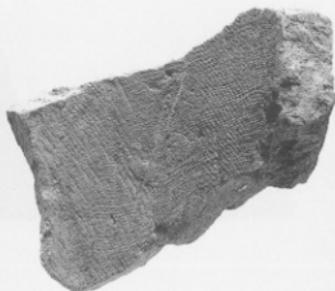
20



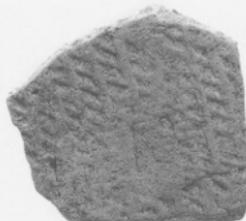
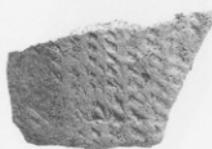
35



21



25



26



27



28



29

31



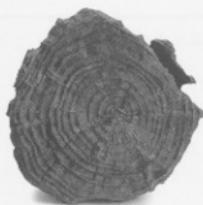
30



33



32



W 2

W 1

掘立柱建物SB03 柱穴P05・P04柱根

報告書抄録

ふりがな	おくむらはいじあと							
書名	奥村廃寺跡							
副書名	(一) 姫路新宮線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第347冊							
編著書名	篠宮 正・跡古環境研究所							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 TEL079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 TEL078-341-7711							
発行年月日	2009年(平成21年)3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
奥村廃寺跡	兵庫県たつの市 神岡町北横内	282294	120062	34度 53分 28秒	134度 34分 11秒	確認調査 1999年12月21日・22日 本発掘調査 2001年1月22日 ～3月12日	確認調査 (990283) 13m ² 本発掘調査 (2000280) 376m ²	(一) 姫路新宮線緊急地方道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
奥村廃寺跡	寺院	奈良時代 平安時代		掘立柱建物 溝 掘立柱建物		須恵器・土師器・瓦 須恵器・土師器		
要約	<p>今回、奥村廃寺東南部の一画の調査を実施した。検出した遺構は古代と中世がある。古代の遺構は僅かに方位が異なる掘立柱建物2棟と溝である。中世の遺構は掘立柱建物1棟である。</p> <p>遺物は瓦と土器がある。軒丸瓦は竹管文縁複弁八葉蓮華文であり、今里分類では軒丸瓦B2類である。時間的には奥村廃寺の軒丸瓦B類は奥村廃寺のI期に位置づけられており、7世紀末の年代を当てる。軒平瓦は出土していない。平瓦は小破片のみで、全体の様相が判明するものは存在しないが、粘土板桶巻作りと粘土板一枚作りのものが存在する。粘土板桶巻作りのものは小型の斜格子叩き目のもののみであり、粘土板一枚作りのものは大型の斜格子叩き目もしくは明瞭ではない格子叩き目のものと繩叩き目のものがある。</p>							

*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告 第347冊

奥村廃寺跡

(一) 姫路新宮線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月18日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500

Tel 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 岸本印刷所
